
とある王国のおとぎ話

paiちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある王国のおとぎ話

【Nコード】

N9151V

【作者名】

paiちゃん

【あらすじ】

孫達に囲まれておじいさんは昔話を始めます。それは、この国ができる前のお話。山里の村で暮らす男の子と女の子が14歳になつて選んだ職業は冒険者・貧乏な2人には良い装備なんて買えません。偶然見つけた迷宮の優先調査権を得ると2人で力をあわせて調査を進めていきます。

とある山村の少年

ここは、とある王国の下町にある、ごく普通のお家です。
ちよつと中を覗いてみますね。

冬の夕暮れ時を迎え、お母さんは夕飯の準備です。お父さんは、
まだお仕事みたいで帰ってません。

暖炉の前の安楽椅子を揺らしながらお爺さんがパイプを燻らせて
います。

「ねえ、お爺ちゃん。お話聞かせてよ！」

ドヤドヤと部屋に入ってきた孫達のおねだりに微笑みながら頷く
と、傍らのマグカップから美味しいお茶を啜りました。

「そうだのう・・・なにがいいかな。」

もったいぶったお爺さんのお話の始めはいつものセリフです。ワ
クワクしながらお爺さんの周りにおとなしく座った孫達を見ると話
を続けます。

「・・・そうだ！この国がどうして出来たのかを話してあげよう。
・・・昔、昔のことじゃった。そのころ、ここら辺は一面の荒れ野
じゃった・・・」

・
・
・

アランはもうすぐ14歳の誕生日です。でも、プレゼントは期待
してません。去年も、そしてその前の年も、プレゼントはおるかお
祝いのご馳走ありませんでした。だって彼は病気がちなお母さん
との二人暮らし、とっても貧乏なんです。

以前は裕福な農民だったそうですが、彼の生まれた年に流行病で
お父さんを亡くしてから、幼い少年を抱え一生懸命お母さんは働い
たんですが・・・何時しか土地を手放し・・・病気になる・・・今
では、体の具合がいい時に近所の針仕事をしながら暮らしています。

そんなお母さんを見て育ったアランは村の学校を卒業した12歳から近所のお手伝いをしてお母さんを助けています。

ある日、畑の収穫を手伝って依頼主の元に戻ると、おじさんが数枚の銅貨を彼の手に握らせると、収穫の一部を村の食堂に運ぶように言いました。彼は、何時もより多いお駄賃を見てニコニコしながらOKすると、大きな籠に一杯の野菜を担いで食堂に向います。

まだ、夕暮れ時には早いですが食堂には数人の男達が酒を飲んでいました。アランは、そんな中を歩いてカウンターに行きました。

「おばさん！お届けものだよ。」

彼の声に、奥でお鍋をかき混ぜていた恰幅のいいおばさんが振り返ります。

「おや、アランじゃないかね。すまないね・・・お母さんの具合はどうだい。お母さんにはお前しかいないんだから、がんばるんだよ！」

そんな励ましに苦笑いで答えると、じゃあね！と挨拶して食堂を出ようとした時に、男達の会話が聞こえました。

「・・・今度の迷宮は・・・良い金になったじゃないか！・・・明日も・・・」

ふん。冒険者か。アランは小さく呟きました。もうすぐ14歳です。何時までも村人の手伝いを続けるわけにも行きません。そろそろ独立した仕事を見つける必要があります。

村外れの自宅に戻ると、お母さんがスープを温めています。そんなお母さんに、ただいまと挨拶をするとテーブルに着きました。暖かいスープと硬パンだけの粗末な食事を取りながら、今日一日の出来事をお母さんに話します。

・
・
・

今日は、お手伝いの仕事がありません。小さな村ですから何時も仕事があるとは限らないのです。

でも、アランにはやる必要があります。裏山に登って、焚き木を集めるのが今日の仕事です。もうすぐ冬がやってきます。家を暖かくするには暖炉の焚き木が欠かせません。

山の木を切ることはキコリの仕事です。彼にはキコリの仕事をしているわけではありませんから、倒木となった枯れ木を集めて焚き木にすることになります。山を歩きながら枯れ木を探すのは骨が折れますが、やつとのことと探し出し、自分の身長の手分ぐらいに手斧で小さく切り分け、丸めて、ツタで背負います。

そろそろと山を下り始めた時、ガサ！という音とともに体が地面に吸い込まれます。

ドサ！という音がしてアランは枯葉に覆われた石畳に落ちてしまいました。

イテテテ・・・と言いながら落ちた穴を見上げます。手が届くぎりぎりに穴の出口が見えてます。背負った焚き木を石畳に積み重ねれば足場として使えそうです。

アランは安心すると、周囲をあらためて確認します。

どうやら、迷宮の入り口みたいです。落ちた場所は幅、奥行きとも5人分の両手幅ぐらいですが、その一角に大人2人が並んで入れるぐらいの入り口がありました。

内部は薄暗いですが、真っ暗闇ではありません。ちょっと、入ってみることにしました。手斧をつかんで恐る恐る入り口をくぐります。

迷宮の内部はひんやりしてます。壁は綺麗に切り取った石をレンガ状に積み重ねたように見えます。入り口は大人の身長ぐらいの高さでしたが通路の天井は高く身長の手分ほどありました。

通路を進んでもぼんやりとした明かりはそのままです。どうやら壁全体が薄く発光しているみたいです。

アランがそろそろ戻ろうかと考えていると、通路の先に光るものを見つけました。少しづつ近づいてくるみたいです。

何だろうと目をこらして、その正体がわかると同時に何かが飛び

掛ってきました。思わず足で蹴飛ばします。

彼が蹴飛ばしたものはポヨンと壁にぶつかり、またしても飛び掛ってきます。

「なんだ！スライムじゃないか。」

飛んできた手まりほどのスライムを、今度は手斧切りつけます。プルンというなんとも手ごたえの無い感触でしたがスライムは2つになりました。シューーという音とともにチャリンという音がしました。銅貨が1枚転がっています。

「これって？スライムの落とし物？」

銅貨をひっくり返しながらく見ると、普通の銅貨です。ちょっとうれしくなりました。

さらに進むと、またスライムです。今度は慎重に一撃で倒しました。これで、銅貨2枚です。スライムは倒すと消えてしまいます。通路が十字路になっているところにきました。これ以上進むと迷子になる可能性があります。だって、迷宮って言うぐらいですからね。

アランは入り口に戻ります。焚き木の束をほぐして焚き木を丸めたツタを長く伸ばします。ツタを腰に結びつけて、焚き木を足場に穴から出るとツタを引っ張り焚き木を回収します。だって、焚き木を取りに山に来たからには焚き木を持って帰るのが常識ですよ。

銅貨2枚を手にながら焚き木を背負って自宅にもどりました。今日も、食事をしながらお母さんに一日の出来事をはなしました。が、迷宮のことは黙っていました。病弱のお母さんに心配を掛けたくなかったからです。

初めての探索

次の日もアランにお手伝いの仕事はありません。

お母さんは、たまにはゆっくり休むことも仕事なんだよ。って言われましたが、もうすぐ14歳のアランには片時もジツとしていることができません。

この間見つけた迷宮の奥を探索するための準備をすることにしました。まず、川原に行って蠟石を探します。村の学校時代には石版に文字を書く蠟石は欠かせません。村の雑貨屋に売ってはいますが、アランはこうやって探しました。

次に、簡単な梯子を作ります。枯れ木では折れる可能性がありますから、近所から竹を譲ってもらって5段の足場がついた梯子を作りました。竹が余ったので、念のために自分の身長ほどの槍も作りました。武器は必要ですよ。まだ、たくさん竹が余っていますが、最後に水筒を作りました。

翌日は、また焚き木を取りに山に向いました。冬に暖炉の火が無くなるのは辛いですからね。帰りにこの間見つけた迷宮の入り口を確認します。まだ、誰も気づいていないみたいです。

4、5日焚き木を集めました。アランにお手伝いの仕事は舞い込んできませんでした。冬を越すための食料は僅かに残った畑からの収穫物だけでは足りません。お母さんも、針仕事の手伝いが来ないので心配しています。

そういえば、スライムは銅貨1枚です。アランは迷宮探索を決意しました。

残り少ない雑穀の粉を練って、暖炉で焼くとみすばらしいですがお昼ご飯になります。数枚作って1枚を紙で包み皮袋に入れました。皮袋には、蠟石と火打石、それに水筒が入ってます。

自宅の外で背負い籠に皮袋と梯子、槍を入れたら準備完了です。念のために手斧も腰に差しました。

山への途中で何人かの村人に会いましたが、普段通りに山に焚き木を取りに行くものと思ったようです。

誰も近寄らない急斜面の大木の下、あの目見つけた迷宮に辿り着きました。山道を大きく外れており、急斜面なのかキコリでさえも近づかないようです。

「よかった！誰も気づいてないみたいだ。」

独り言を言うと梯子を下ろし、入り口前の石畳に降りました。籠を背から下ろすと皮袋を腰に下げ、竹槍を持ちます。

また、スライムが飛び掛ってくるかもしれません。アランは慎重に通路を進んで行きました。

「エイ！」って叫びながら竹槍をスライムに突き刺します。チャリンと銅貨がこぼれます。

スライムが飛び掛ったところを竹槍で弾き返し、ひるんだ所で槍を刺すパターンが良いようです。これで3枚の銅貨が手に入りました。

通路を進むと、前に引き換えした十字路に差し掛かりました。アランは皮袋から蠟石を取り出します。出口はこちらの目印を床と壁に描くと、十字路を右に進みます。

次はT字路です。真直ぐな通路と左に折れる通路があります。アランは前と同じ様に出口方向を示す目印を書いて、真直ぐに進みました。

通路を進むにつれスライムの数が増えてきました。入り口付近は、たまに1匹でしたが、このあたりでは連続で出ます。それも2匹一緒のときもあります。相変わらずのパターンで対処しますが、こういう時は長い槍は不便です。元々短い槍でしたが柄の真ん中辺をもつてコンパクトに対処します。

そうこうしている内に、目の前に扉が現れました。

「これって、チョットやばそうだよねえ。」

独り言を言いながらドアノブに手を掛けます。鍵はかかってないようです。

ギーーっときしんだ音を立ててドアが内側に開きます。そつと中に入りました。

部屋の中は村の食堂ぐらいの大きさです。部屋も通路と同じように壁が発光し薄暗くあたりを照らしています。

さらに中に入ると、ボタン！という音を立ててドアが閉じました。慌てて駆け寄りドアを開こうとしましたが、ビクともしません。こういう時こそ冷静にしなければなりません。とりあえず、深呼吸・・1、2、1、2・・・

部屋に仕掛けがあるかもしれません。ゆっくりと壁伝いに歩きながら部屋を観察します。

「ん・・これなんだ！」

対面の壁を歩いていたときに足元に壺を見つけました。両手で抱えるぐらいの壺ですが、よく見ると台座が2つあり、片方にだけ壺が置かれています。

こんな場合のお約束に、壺の台座を換えることで何とかなる場合があるのを思い出し壺を掴もうとすると、シュルシュルと蛇が腕に絡み付いてきました。どうやら壺に隠れていたようです。すばやくもう一方の手で尻尾を掴み、振りほどいて投げつけます。

「いてて・・噛み付き蛇か！イヤなのがいたな。」

噛み付き蛇は毒は持っていませんが、噛む力が強く、尖がった歯が沢山あります。無理やり噛み付いたところを引き剥がしたので右腕は血が滲んでいます。

蛇は鎌首を持ち上げトグロを巻いています。バネみたいに飛び掛ってくる気配満々です。

シュ！っ！と音を立てて飛んで来たところを竹槍で防ぎます。すると蛇は竹槍に絡みついてきました。

足元に竹槍を落とすと右足で踏んづけます。生きている竹を踏んづけているみたいな感触が伝わりますが気にしません。腰の手斧を抜くと左手で蛇の胴めがけて叩きつけます。

ガツン！という音とともに蛇が両断されました。チャリンと銅貨

の音が部屋に響きます。

「おっと！噛み付き蛇は銅貨2枚なんだ！」

ちよつと嬉しくなりましたが、右腕の出血が続いているようです。血の滲んでいる範囲が予想以上に広がっています。上着を脱いで右腕を見ると、蛇の歯が何本か刺さったままでした。無理に引つ張った時に折れたようです。歯を抜き取って、汗拭き用の手ぬぐいで縛ります。

右腕はちよつと痛みますが、改めて壺の中を見ると何かがキラ！と光ました。壺を両手で抱え逆さまにするとポロリつと銀色の鍵が出てきました。とりあえずゲットです。

そのまま抱えた壺の台座を変更します。

どこかで、カチリつと小さな音がしたのをアランは聞き逃しませんでした。扉の前に行くとドアノブに手を伸ばし、引いてみます。ギイーとドアが軋みながら開きます。

怪我したことから今日の探索はここまでと自分に言い聞かせ、出口に向って歩き出します。途中何度かスライムの襲撃に会いましたが、そこは、それ、なれたみたいです。

迷宮の入り口広場に着くと、ホット一息ついて、お弁当です。

パサパサしたパンをほおばり、水筒の水で流し込みながら今回の探索を振り返ってみます。

スライムは何とかなる。噛み付き蛇は厄介だな。あと3日もすれば、俺も14歳だ。そろそろ将来を考えないと・・・冒険者！いや、お母さんをこのままには出来ないし・・・

服についたポケットの銅貨を数えてみます。・・・23枚もありました。

アランの村でのお手伝いは1日どんなに頑張っても銅貨10枚になる日はそう多くありません。親子2人の暮らしは慎ましいものですが、それでも、1日当たり銅貨10枚は必要です。今までは、病弱なお母さんの針仕事とアランの村のお手伝い賃とお礼に時々もらえる収穫物でやりくりして来ましたが、何時までもお手伝いではお

母さんを楽にしてやることも出来ません。それに、14歳は村では成人です。お手伝いを卒業して一人前の職業につくことが成人としての義務になります。しかし小さな村では、皆それぞれに仕事をしており、不足している職業というものがありません。農家であれば、そのまま農夫となつて、やがて親の後を継ぐことも出来ますが、アランの家には小さな畑があるだけです。

そんなことを考えながら昼食を食べ終わると、籠を担いで梯子を上り山を降り始めました。

山の出口である樅の木を過ぎると、村が見えてきます。空の籠を背負つて家路を辿る彼をジッと見つめる者がおりました。

幼馴染の女の子

その日、山の迷宮から戻ったアランは、食事を前にしてお母さんに話を切り出します。

「お母さん。あと3日で僕も14歳になるんだ。そろそろ将来を決めたいんだけど・・・」

「・・・そんなになるのかしら？月日は早いものね。」

アランを改めて見つめます。何時の間にか大きくなったんだわ。

あの人が死んでから、どうにかこうにか親子2人で生きてきたけど・・・もうそんな年になったのね。

「それで、なんになるの？あなたの人生だから、私がとやかく言うべきものではないけれど・・・」

「・・・冒険者になるつもり！でもやっていけるかどうか、もう一度確かめて僕に出来るようだったら・・・なるよ。」

「そう・・・」

お母さんは反対しませんでした。いえ、出来ませんでした。彼の父も実は冒険者だったのです。若いころは、それこそ誰もが知る2つ名を持つ冒険者でしたが、

この山村を訪れ、

私を見初めて、

蓄えを元に畑を買い、

そして子供ができるまでの短かったけれども幸せな日々。

そんな中、不幸が突然訪れました。

迷宮の中に住む魔物が、ある日突然あふれ出る時が有ります。アランを生んで間も無くそれは起こりました。

当時、村には数人の冒険者が滞在していた。村中の男達が冒険者の指揮のもと、押し寄せるオークの群を待ち構え防戦しましたが、何匹かは村の中に入ってしまった。あの人はずただ一人でこれを迎え撃ち、全て始末しましたが、そのとき受けた傷が元で死んでし

まいりました。

病弱で寝込みがちな私に何がしかの仕事が入るのも、あの時の恩を村人が忘れていないために他なりません。

やはり、この子もあの人の血が流れている。反対してもなんになるう。きつと村を飛び出して行くに違いない。だって、あの人のこどもだもの。

「・・・そう深刻に成らないでよ。明日もう一度確かめるんだ！僕にも出来るかどうかをね。」

アランは、何やら深く考え込んでしまったお母さんにそう言うところ、ご馳走様！の言葉もそこに自分の部屋に向いました。

次の日、アランはまた迷宮に向います。今日は一つの目標があります。親子2人で生活できる金額を今日中に稼ぐことが出来るかどうか、その金額は、銅貨20枚！これが出来れば冒険者としてやっていけそうです。

・
・
・

夕暮れの中、アランは軽い足取りで山を降りてきました。どうやら目標の金額を得ることが出来たようです。

そんな彼を、山の出口の樅の木の根元で待っていた人がおりました。

「アラン。嬉しそう？」

急に声を掛けられ、驚いた顔を声のした方に向けると、一人の少女が立っていました。

「サリナか！驚かすなよ。びっくりしたんだからな。」

少女の名はサリナ。同い年の幼馴染です。サリナはお婆ちゃん子です。両親はアランの父親と同じように、あの日死んだからです。両親が居ないことで悪ガキどもの虐めにもよくあいましたが、そんな虐めを見るたびにアランはサリナを庇ってきました。無口な少女が自分から話掛ける者は極限られ、アランもこの中に入っています。

「・・・昨日も見かけた。今日も同じ。山に入っても籠が空なのは何故？」

アランは迷いました。だってお母さん以外に迷宮探索を知っている人はいません。誰かに話したら・・・一流の冒険者がどんどん押し寄せます。そしたらアランが冒険者になるって目的が達成できなくなる可能性があります。

「そうだね。サリナには話しておくよ。僕が山に行くのは、僕が見つけた迷宮探索のためだよ。探索して、魔物と戦って、一日の収入が銅貨20枚。これが出来れば冒険者に成るって決めてたんだ。」

少女はアランの話をジツと見つめて聞いていました。

「・・・私も・・・冒険者に成る！」

アランは驚きました。でも、よく考えると・・・有り得る話です。サリナのお婆ちゃんも村唯一の薬屋です。いろんな薬を扱っていますが、そんなに売れるものではありません。ひよつとしたらアランよりも貧乏な暮らしをしているような気がします。サリナを良く見ると、服装は清潔ですが至る所ツギハギだらけです。靴も誰かの使い古したものを紐で補強して履いています。

それに、もう一つ気になることがあります。サリナは1ヶ月以上前に14歳になっていますから、村の中でなにかの職を探したはずですよ。それが決まっていないうことは・・・村を出て町に働き口を探さねばなりません。でも、お婆ちゃんは年老いています。

「大変だよ。魔物も出るし。怪我、いや死んでしまつかも知れないよ。」

「判ってる。薬の知識は有るし、少しだけど・・・魔法も使える。」

少女が答えます。理由はいろいろ有るようですが、ここで暮らしながら年老いた身寄りを世話するのは大変な気がします。

「じゃあ、2日後の朝、ギルドの前で・・・一緒に冒険者になるうー！」

アランは自宅に戻ると、何時ものようにお母さんに今日の出来事

を話します。

「そうなの。あの子も大きくなったのね。」

お母さんはそう言うと、彼女の亡くなった両親の話をアランに聞かせます。

「かわいそうと言ってしまえば其れまでだけど・・・貧乏さは家より酷いと聞いたことがあるわ。でもあの子はそのことに不満や不平を言ったことが無いわ。両親がいないから町に行っても、碌な職が有るとは思わない。あの子と一緒にやりたいというなら、アラン最後まで面倒見てあげなさい。」

アランも探索の仲間が増えることに不満は有りません。サリナの持つ薬の知識は、魔物との戦闘で傷を負ってもある程度は対処できることになるわけですし、魔法は魔物との戦闘に有効に使用できるはずです。今は迷宮1階を探索中ですが、2人ですればさらに地下を目指せます。

「それで・・・話を戻すけど、本当に冒険者を目指すのね？」

「もちろん！」

お母さんはその言葉を聴くと席を立てて自室に戻って行きました。そして、1本のショートソードをアランに手渡します。

「今まで内緒にしてたけど・・・あなたのお父さんは若いころ冒険者だったの。死んだ原因は病死とあなたには言ったけれども・・・本当は、魔物と戦って、そのときの傷が元でね。これは、あの人の形見！生前、赤ちゃんだったあなたにこれを見せて、大きくなれよって言ってたのが昨日のようだね。」

アランは無骨な造りの鞘からショートソードを抜き取ります。

この剣は、アランが初めて見るものです。今まで見なかったことから、お母さんの箆笥の奥にでも仕舞ってあったのかも知れませんが長い間手入れもされていなかったでしょうけども、刃には一点の曇りもありません。よほどの名剣なのかも知れませんが。

「いいの？なんか僕の手には勿体無いと思うけど。」

お母さんはそんな彼に黙って頷きます。

・ ・ ・

約束の朝です。アランは14歳になりました。

何時ものズボンと上着には何の変化ありません。でも、彼の腰の後ろにはショートソードが括りつけられています。何故か彼には何時もと違う朝に思えました。

ギルドは村の大通りの一番大きい建物です。隣はよくお届け物をする食堂があります。

「やあ！待った？」

アランと同じように何時もの服装でギルドの前に立つ少女に声を掛けます。

サリナはフルフルと首を振るとギルドのドアを開けて中に入っていきます。アランも慌てて後を追いかけます。

ギルドと2人の冒険者

朝早くのギルドは閑散としてました。まだ早いのか冒険者の姿は有りません。

ドアを開けて真直ぐ前には、カウンターになっています。右手は数人が着座できるテーブルセットが3つ。左手には大きなボードがあり、アランの顔程の注文書がまばらに掲げられています。

サリナの後を追いかけてカウンターに向います。奥の事務所から2人を見かけたお姉さんがやってきました。

「ようこそ、ギルドへ！ 私たちトリエット・ギルドは貴方達を歓迎します！」

お姉さんの挨拶は決まり文句みたいですが、様になってます。ちよつと呆氣にとられた2人でしたが、ユリアに足を踏まれたアランはお姉さんを前にします。

「実は・・・僕たち、14歳になりました。確か、ギルドの認定は14歳で良いんですよね？登録したいんですが・・・」

「はい！OKですよ。ではここに名前と出身地・・・トリエットでいいわよ。それに、何か特技があればこの欄に書いてね！」

結構、テンションの高いお姉さんです。言われるままに書類を作成していきます。

「できたかな？・・・うん。良いわよ。問題なし！・・・へへ、サリナちゃんは魔法が使えるんだ。」

2人の作成した書類を確認しながらそんなことを言ってます。最後に手の平ほどのつかい印鑑をドカンと押しました。次に、カウンターの下から何やら水晶玉を取り出しました。

「さあ、今度はこれよ！両手でこの玉を掴んでみて！」

「???」を頭に浮かべながらも2人は代わる代わる掴んでみます。水晶玉を掴むとヒンヤリとした手触りが伝わります。突然、ピリっと手先が痺れます。それと同時に水晶玉がピカッ小さく光ります。

「ビックリしたかな？でも、これで2人の能力が判るんだよ。ちょと待っててね。」

お姉さんはそう言うのと水晶玉を持って事務室に戻っていきまして。さて、次はどんなことをするのかと思いついて待っていると。お姉さんが戻ってきました。何やら手に持っています。

「ハイ！以上で登録終了。これはアラン君のね。こっちはサリナちゃんの。カードを無くさないように鎖で首から下げたら良いよ。」
そう言いながら、2人の首にカードを鎖で下げてくれました。

「それから、このカードは単位の基本になっているから覚えておいてね。詳しくはこのマニュアルを読むこと！」そういつて小さなノートを2人に配ります。

「以上で終了です。何かご質問は？」

なにやら一方的に始まって、終わってしまいました。いろいろ聞きたいことはありますけど……

「一つ、いいですか？」

「はい！どのようなことでしょうか？」

お姉さんがにっこりと微笑みます。

「この村のはずれに迷宮がありますよね。それとは別に、違うところに迷宮をみ……」

お姉さんがあわててアランの口を閉ざします。そのまま、アランの襟首を掴むとカウンターのの中に引き込みました。

「ちよつと来なさい！」

今までと全く違うお姉さんの態度にアランは頷くだけでした。そのまま奥の事務室の方に連行されていきます。サリナはヨッコイショと言いつながらカウンターを乗り越え2人に続きます。

2人は事務室を通り越した会議室みたいなおへ通されました。

「ここであつと待って貰うわ。マスターを呼ばないと……」
やがて、お姉さんが横幅のある小人のようなお爺さんを連れて戻ってきました。ドワーフ族！と小さな声でサリナが呟きます。

「そう緊張するでない……別に取つて食うわけではないんです。」

・詳しい話をしてくれないかの。」

2人に席に着くように言うと言を切り出します。

アランはいままでの経緯を話しはじめました。発見のあらまし、地下の迷宮、スライムとの戦い、壺を使ったカラクリ……

マスターは静かに聴いています。

アランが話し終えた後は静かに考えています。

「わしが知っている内では2番目じゃ。マスターになってからは初めてじゃがのう。」

マスターはパイプを取り出すとプカリと煙を吐き出します。

「じゃから、1番目と同じ扱いとする。いいか、若いの。良く聞いておくのじゃぞ。まず、発見者はアランと認定する。そして、発見した迷宮をマウント・ワンと命名する。マウント・ワンへの探索はアランが20階層をクリアするまでは何人も入ることを禁止する。これは後でわしが封印を施そう……なに、封印してもアランのカードをかざせば本人及び本人と同行するものは入る事は問題ない。最後に、アランがマウント・ワンの地図を作りこれをギルドに提出すること。地図は20階層まででよい。それ以降の階層の地図を作成した場合は、ギルドが買い取りを行う。1階層当たり銀貨10枚でよいかな。最後に、アランが20階層をクリアした段階で5階層までの地図を冒険者の求めに応じて売り出すこととする。この場合、手数料として、売れるたびごとに銀貨1枚をアランに与える。」

こんなものかの……といいながらマスターは席を立ちます。アランは呆氣に取られて聞いていました。

「そんな顔しないで。後で正式な契約書を作って渡しますから。」
優しいお姉さんに戻ってます。

「いったん戻ってから、出かけようと思ってますけど……良いんですよね？」

「ハイ。大丈夫です。それと言い忘れてましたけど……一週間に一回はギルドに顔を出してください。生存確認等の手続きがありますから、それらもさっきのマニユアルに書いてあるんですが、皆

さん忘れる方が多いんですよ。」

2人は一旦、アランの自宅に戻ることになりました。急斜面にあるマウント・ワンの入り口には、サリアの今の装備では心もとないところがあります。最低でもズボン装備です。スカートではいけません！

アラン達が自宅に戻るとお母さんがお茶の用意をして待っていました。

ちよつと待つてとサリアに言うのアランが自室に向います。なにやら探し物のようです。

お茶を美味しそうに飲むサリアの前にお母さんは座ります。

改めてサリアを見ると、貧しい身なりですが清潔な服装です。ふと、視線を落とすと、少女の脇には魔法使いが使う杖があります。確かあれは・・・

「お婆ちゃんにもらった！」

お母さんの視線に気付いてサリアが答えます。

そうだ！あの杖だ。あの時は、お婆ちゃんもまだ現役には負けないつて言いながら、あの杖を振るって魔物に全体攻撃魔法を打ち込んでいたわ。

アランが父の残した剣を使うようにこの子も縁者の杖を使って冒険者になるんだわ。

ボタンとアランの部屋のドアが開くと、アランが何かを持ってきました。

「サリア、これを使えよ。マウント・ワンは急斜面だ。その装備じゃ行けないぞ！」

「わかった！」

サリアは席を立つとアランから服を受け取ります。いきなり服を脱ぎだすサリアを慌てて止めると、アランの部屋に押し込みます。

「着替えたら出てこいよ。」

お母さんに向って、フー、とため息を付きます。あらあら仲がいいですことなんて言いながらアランにお茶を入れます。こういう時

のゴクン・・・アッチッチはお約束ですよ。

「できた！」

サリアがアランの部屋から出てきました。ダブダブです。上着から手も出ていません。

お母さんは、裁縫箱を出すと大急ぎで手直しをはじめました。ズボンをたくし上げると、くたびれて紐で無理やり足に固定した靴が顔を出します。しかも、靴下を履いていません。ここまで・・・貧乏だったのと他人ながらも涙が溢れます。

急いで、アランの小さくて履けなくなった長靴を探しだし、ダブついたズボンの裾を切るとその布でサリアの足を包みます。即席の靴下の出来上がりです。長靴はピッタリとサリアの足に合いました。次に、シャツと上着です。どうせ、息子のものでし、思い切って余分な箇所を鋏で切り取ります。

「こんなものかしら？・・・どう？動きやすくなったでしょ。」

サリアは小さく頷きます。

「最後はこれね！」

お母さんは暖炉の上から小さな包みを運んできました。包みを開くと・・・緑色が少し薄れたマントです。フードも付いています。

「私が娘時代に着ていたものだけど・・・使って頂戴！魔法使いにはマントが一番似合うわ。」

小さくお辞儀をしてマントを受け取り羽織って見ます。ボーイッシュな姿が隠れて立派な魔法使いに見えます。

「良く似合うわ。・・・アランをたのみます。」

「ありがと。」

ぶつきらばうですが、サリアのお礼にお母さんの胸は熱くなりました。

「では、出かけなさい。でもちゃんと元気に帰ってくるのよ！」

「ハイ！」

2人は元気良く出かけて行きました。

サリナの力

2人は山に向います。

今日のアランは籠を持っていません。今日からは冒険者なのです。竹の槍を杖代わりに山道をそれでマウント・ワンに向います。

「急斜面だけど、大丈夫？」

「いい。今日は靴が痛くないもの。」

もともと華奢なサリアには、急斜面でも体重が軽いので苦にならないようです。

斜面の雑木を掴みながら、すべり落ちないように気をつけて進みます。

「ここが、そうだよ！」

入り口広場の梯子までたどり着いたアランは、少し遅れて付いてきたサリアに説明します。

「梯子持つてるから先に下りて！」

小さな広場ですが、迷宮に入る前にちょっと休憩です。お母さんが作ってくれた焼き菓子を2人で分けて食べます。

「おいしい・・・」

そういつてサリアがアランに微笑みました。

入り口より中に入ります。先頭はアラン、後ろがサリアです。

「ちよつと、暗いけど・・・見えないことはないんだ。ずっと奥までこんな感じだよ。」

「ライト！」

杖を上げてサリアが呟きます。

2つの光の玉が杖から浮かび上がると、1つはアランの前方5歩程度の所に移動していくと、アランと天井の中間の高さで止まりま

した。もう一つはサリアの後方に同じように移動していきます。

「移動に合わせて、着いてくる。」

サリアはそう言うと言動を促します。

昼のように明るくなった迷宮は、ずっと奥まで見通せます。

「ちょっと待つて！」

Ｔ字路に差ししかろうとしていたアランが声をかけます。Ｔ字路の左側で何かが動きました。

竹の槍を何時ものように真ん中で持つとゆっくりと近づいていきます。

「いた！」

何時ものスライムです。左通路に飛び込むと同時にスライムを槍で叩き、床に打ち付けられたところを槍で刺します。

プシュツと音がして銅貨が１枚こぼれます。

「明かりがあると助かるね。ほら、魔物を倒すと何故だかお金を落とすんだ！」

サリアに振り返って、銅貨を渡します。ごそごそと服の中に仕舞い込みました。

「道が２つある。」

「右側の道はもう見たんだ。小部屋と行き止まり。奥に進むとスライム以外に噛み付き蛇もいるから注意してね。」

「蛇・嫌い！」

２人は左側の通路を進みます。スライムと何度か出会いましたが、周囲が明るくなったので、いきなり飛び掛られることはありません。

少し進むと十字路です。

出口の方向を何時ものように蠟石で床と壁にアランが書いていると、サリアが布に炭で何かを書いています。

「何をしてるの？」

「地図！」

先程のアランの話と今の状況を簡単にマッピングしているみたいです。

そう言えば、ギルドマスターに地図を作れって言われてました。

十字路を左に進みます。しばらく歩くと通路の先に扉が見えてきました。

扉を開こうとしましたが動きません。扉をよく調べるとドアノブの下に小さな鍵穴があります。

「この前来た時に見つけた扉の部屋で、これを見つけたんだ。」

アランは、銀色の鍵を取り出しました。鍵穴に差し回します・・・カチリ！ドアの鍵が開いたようです。

扉を開けて、そつと中を伺います。突然の明かりに驚いた何かガザー！と動く音がします。何かが沢山いるようです。

アランは急いでドアを閉じました。

「どいて。」

小さな黒い玉を持ったサリアがアランを脇にすると、ドアの前に立ちます。

黒い玉についた紐を片手で引っ張ると、急いでドアを開け投げ込みました。

バァーン！という音がして、ドアの隙間から鋭い光が漏れています。

「爆光球・・・攻撃力0、しばらく戦闘不可。」

サリアが先頭になって、部屋にはいます。こんなに過激だったっけ？と首を振りながらあらんが続きます。

部屋の中は数匹の角トカゲと同じ位の噛付き蛇が目回しています。片っ端から竹槍で止めを差します。

「これ？」

サリアが銅貨を拾いながら気付いたものをアランに知らせます。

部屋の奥まった所に小さな祭壇があり、祭壇の奥になにやら小箱が安置されています。

アランが蓋を開けると、銀色の指輪が入っていました。

「呪いの指輪かもしれない。後でギルドで鑑定して貰おう！」

サリアが首をコクンと了解の仕草をしました。

この部屋を隅々まで調査し、他に何も無いことを確認して2人は部屋を出ます。

先ほどの十字路に引き返し、今度は真ん中の道を歩きます。

通路を進むと途中で直角に折れ曲がり、その先は行き止まりでした。

行き止まりの壁際に壺が2個置いてあります。慎重に近づき槍で壺の中をつついてみます。

何もないよ！とサリアに振り向いた時、サリアがいきなり杖を構えました。

「メルト！」

杖から拳ほどの火球が飛び出るとアランの足元に着弾します。

ジュツ！という何かが焼かれる音がします。恐る恐るアランがあしもとを見ると、焼け焦げた噛付き蛇がいます。見る見るシューと音がして消えていきます。

「壺の影にいたの。」

サリアが銅貨を拾いながら言います。

また、十字路に戻ります。最後の右側の通路です。

通路は右に、左に折れ曲がりながら続いています。

曲り角には、スライムや噛付き蛇が待ち構えていましたが、通路が明るいので、大曲しながら油断せずに進むことで不意を突かれることはありませんでした。

少しづつ迷宮の探索に慣れてきたようです。

アランはやはり、仲間がいるってことはいいな！と思いました。

さらに進むと通路が広がりました。

行き止りかな？と思っただらちよつとした広場です。じぶんの家の食堂ぐらいあるな。等と考えていると、サリアがこちらを向いて、かべの一角を指差しています。

急いでサリアの所に行くと、壁の一部が二重になっていて壁の間に下の階に下りる階段がありました。

一階部分の探索が終了したのです。

地下2階からヒンヤリした風が吹いてきます。

「今日はここまでにしようか？」

サリナは分かったというように首をコクンと振ると、しゃがみこんで布になにやら書き付けます。1階の地図をまとめているようです。

サリナの作業が終わったのを合図に來た道を戻ります。

途中、何回かモンスターを退治すると迷宮の入り口に戻ってきました。した。

昼前に迷宮に入りましたが、出てみるとお日様が西にかなり傾いています。

お母さんが持たせてくれた焼き菓子を2人で分けると遅い昼食を取ります。水筒の水も2人で分けて飲みました。

山を降り、村に入る手前でサリナが呼び止めます。

「これ！」

今日の冒険者としての収穫です。サリナはマントの布に銅貨を広げます。

全部で53枚ありました。

「朴達の生活も苦しいけど、迷宮の地下に降りるには装備が心もとない気がするんだ。3等分してサリナと僕、それに装備用の貯金

にしたいけど・・・いいかな？」

「いい！」

アランはささっと銅貨を分けます。そして18枚の銅貨をサリナに渡します。

「僕も18枚貰うよ。残りの17枚は明日ギルドに預けよう！」
サリナが頷きます。

村に入るとサリアに別れを告げます。

「では、お休み！明日の朝来てね。」

「分かった！」

2人はそれぞれ自宅に戻りました。

中途半端な武器

あくる日。

トントンと扉を叩く音に気が付いてアランは扉を開きます。

「来た！」

「おはよう！」

「待つて！急いで用意するから。」

片手剣を腰の後ろのポーチに並べて取付け、水筒をベルトに結び、お母さんの作ってくれた薄い焼きパンをポーチに入れます。

お母さんに行つて来る！と告げ、竹の槍を取ると家を出ます。外では、サリナが待つてました。

あれ？つとアランはサリナの姿が昨日と少し違うことに気が付きました。

ギルドに向う道筋、ずっとその違いを考えていましたが、ギルドの前でやっと分かりました。

昨日アランのお母さんが挟みで短くした袖や裾がちゃんと繕つてあつたのです。それに、昨日はなかった布の小さなバックを下げています。

「あのう・・・鑑定つて出来ますか？」

アランがそう聞くと、出来るとのことでした。サリナは昨日の指輪をカウンターのお姉さんに渡します。

「ちよつと待つててね！」

お姉さんは指輪を持つて事務所に入っていました。

事務所で誰かと話し合う声がしばらく続いていましたが、やがて、マスターとは違うドワーフのおじいさんが出てきました。

「おめえらか、これを持ってきたのは？」

「そうですが・・・何か問題でも？」

「いいや、そうじゃねえ。近頃あまり見かけなくなったのな。

これは、守りの指輪じゃよ。まあ、効果は低いがな。転んでも怪我がない程度でしかない。あまり過信しないことじゃな。」

そう言つと、お爺さんは事務所に入つて行きました。

「値段も高くないそうよ。レアな金属甲冑並の守りの指輪なら、金貨50枚以上するらしいけど、これはせいぜい皮の鎧程度かそれ以下かつてとこらしいから・・・銀貨2枚程度らしいわ。

「初めて見つけた宝物ですから大切に持ってますよ！・・・ところで、鑑定料はどうなるのでしょうか？僕達お金はあまり持ってないんですけど・・・」

「珍しいから、サービスだつて！良かったわね。」

思わず2人の顔がほころぶ。

「ありがとうございます。」

礼を言つてギルドを出ようとした時です。

「ほれ！若いのが、ついでだ、持ってけ！」

おじいさんが何かをアランに放ります。

掴んだ物は、棒の先にナイフが付けられたものでした。危なくないうちに、刃先には皮のケースが付いてます。

「わしが若い時に作ったものだが、誰も欲しがらん。まあ、中途半端というわけだな。やるから使ってみろ。それと、判らん物は持つて来い。それが、条件じゃ！」

竹の槍と比べて、頭1つ分くらい短かいですが、手のひら2つ分くらいのナイフが先端に付いてます。思ったより軽く、アランでも簡単に振り回せそうです。

「いいんですか？ありがとうございます。」

こんどこそ、2人はギルドを後にした。

マウント・ワンへの道すがら、守りの指輪をサリナに渡します。
「いいの？」

「サリナの防御は僕より低いから持つてて。」

アランの装備も丈夫な布の服程度でしたが譲ることにしました。

今日は地下2階の探索です。

1階フロアを地図通りに進み、階段まで辿りつきました。

サリナの魔法【ライト】はフロアが違っても継続するようです。
明るく照らされた階段を2人は下りて行きます。

アランは、おじいさんに貰った武器を装備してます。

途中で噛付き蛇と戦って、この武器が中途半端だと言った意味が分かりました。

槍より短いので振り回しやすいのですが、先端のナイフの刃先が短いのでなかなか切ることが出来ないのです。

切ろうとするとツバの部分に当たってしまうのです。また、突こうとしても、力がいります。さらに槍より短いので、杖のように持つとちょうどナイフの柄を握っているような感じです。

刃先のカバーを外しているので、ちょっと危険です。

でも、うまく当たれば、竹の槍より数段威力があるので、アランは満足してます。

道が別れる場所には印を描いて、それをサリナが布に記入していきます。

「ここは、さっき通った。こっち！」

サリナが現在地を確実に把握しているようです。

アランは明るく照らされた迷宮を一步一步進んでいきます。

道が直角に曲がったところでは、光球を先に行かせて、アランが

そつと顔を出して安全を確認します。

そんなことを何度か繰り返した時でした。

「・・・！、いる。」

光球に気がついた魔物がこちらに向ってきます。

アランの声にすかさずサリナは、かばんの中から何かを取り出すと、角の向うに投げつけます。

バーーン！という音がして、角の先が強い光に満たされます。

「とりあえず、投げといた。」

やり方は過激ですが、アランは飛び出ると、まだ目を回している魔物に止めを刺します。

魔物は人型をしたトカゲです。鼻先に小さな角がある（角トカゲ）です。

トカゲは以外と素早い動きをします。

魔物も同じように素早く動き、攻撃してきたらと思うとちよつと不安になりました。

胸元にグウツ！と体重を掛けてナイフを突き刺すとシューと魔物が消えて行きます。

「・・・ちよつと、刃先が鈍いのかな？」

何か言った？って言うような目で、銅貨を集めていたサリナがこちちを見てます。

いや何でもない。ってアランは答えると先を急ぎます。

秘密の部屋

しばらく歩いていくと階段を見つけました。

「これで、地下3階に行けるね！」

後ろを歩いていったサリアにそう言って振り返ります。

そうね！の短い返事を期待してましたが、サリナは何やら地図を睨んでいます。

「どうしたの？」

「ここ、行つてない。」

アランはサリナの示す地図を見てみます。

そこは、さっき入った部屋でした。噛付き蛇が1匹だけいて、部屋には特に何も無かったようでしたが・・・

「ア！・・・」

そういえば、その部屋には、場違いな本棚があり、2人でどっこらしょ！って動かしてみると、狭い穴が奥に続いていました。

後で来よう。って先を急いだ事を思い出したみたいです。

「もどつて、確かめよう！」

2人はさっきの部屋に急いで戻ります。

さっきの部屋の扉を恐る恐る開けると中を確認します。時間がたっていますから、魔物が戻っている可能性もありますからね。

本棚は壁から移動したままです。

早速、穴をもう一度確認します。

人が這いずってどうやら先に進めそうです。

どうしようかとサリアを見ると、魔法で光球をもう一つ作ったようです。

「どいて！」

アランを無理やり脇に退けると、光球を穴の中に飛ばします。

穴はさほど奥行きがないようです。光球はスウィット穴をくぐって、奥の部屋みたいな空間に吸い込まれた行きました。

先の部屋からぼんやりと穴の中が照らし出されます。

「よし、様子を見てくる！」

ちよつとまつて、とサリナに告げて、アランは穴を這いずっていききました。

あなの出口には、先ほどの部屋と同じ位の部屋がありました。あなの出口は床から腰ぐらいの高さです。

ヨイショ！つと穴から出ると、素早く周囲を確認します。．．．
なにも動くものは居ないようです。

「大丈夫。入って来いよ！」

穴の入口で待つてるサリアに声を掛けます。

待つこと直ぐに、サリナは穴から這い出してきました。

2人で部屋を注意深く観察します。なにも無いようです。

「あれ！」

サリナが何かに気が付いたようです。

それは、壁の一角に作られた祭壇のようです。

奥行きの無い小さな窪みに、動物を模った1対の石像が鎮座しています。

「でも、ちよつと変だよね。片方が別を見てる。」

石像の片方は、もう一方を向いているのですが、別の石像は窪みとなった壁を見てます。

「ひよつとしたら！」

アランは壁を向いた石像を動かして両方の石像が互いに向き合うようにしました。

ゴゴゴオーと音がします。

2人が振り向くと部屋の壁の一角が横に開いていきます。
新たな部屋の出現です。

その部屋は不思議な雰囲気のある部屋でした。
最初から明るいのです。

中央に裁断らしきものがあり、両側に松明が燃えています。
だれも居ないのに何で？疑問を持ったアランが松明に近づきました。

「これ、燃えてないぞ！・・中の何かが光ってるんだ！」

サリナがその声に、松明を観察します。

「魔法・・中の結晶が魔法の炎を作ってるの。」
なるほどね。と納得して、祭壇に向います。

祭壇は2段に石を積み重ねた造りです。

誰かが、昔の誰かが捧げたのでしょうか、花束がドライフラワーのようになっています。

その、中央に石棺があります。

石棺は複雑な彫刻が細密に彫られており、それだけで神々しい雰囲気を持っています。

「お墓かなあ？」

「開けてみる！」

サリナが祭壇を登っていきます。アランも慌てて着いていきます。
石棺は重く2人の力ではビクともしません。

こじり開けようともしましたが、精密な造りなのでしょう、ナイフの刃さえも入るような隙間ありませんでした。

「わかった！」

石棺の周囲を、その模様を調べていたサリナでしたが何か発見したみたいです。

「下がって！」

アランはサリナに従って祭壇を降りました。

「我、光の世界より訪れたり、闇の祭壇眠りたる者よ、その眠りを解き、姿を現さんことを、我は願うなり・・・」

「呪文なの？」

「書いてあった。」

石棺の模様の中に呪文が彫り込まれていたようです。

突然石棺の蓋の中央が割れ、中から光が漏れ出しました。

ズズー・・・と両側に石が擦れる音をたてて分れていきます。

ゴトツつと音をたてると、蓋は石棺にもたれるように落ちて止まりました。

パーつと光が強くなります。

光の中から人影が・・・石棺の中から起き上がるように身を起きました。

人影は周囲をひとしきり見ているようでしたが、アラン達を確認すると、アラン達に姿を向けました。

人影は、段々と輪郭を現します。アラン達が見たことも無い服装で、見た感じではとても偉い人に見えました。

「私の眠りを覚ましたのはお前達か？」

突然、アラン達の頭に強い思念の言葉が入ってきました。

2人は驚いて顔を見合わせましたが、偉い人には逆らえません。

「はい。」

とりあえず正直に答えます。

「ここは、閉鎖された空間のはず？・・・まあ、入ってきたからにはしょうがあるまい。」

「ところで、世界は平穏かな？」

アランには平穏の意味が分かりませんでした。サリナが代わっ

て答えます。ここは平穏だと・・・
ひとしきり問答が続きます。

どうやら、かつてここには大きな王国があったようです。石棺の人は、その国の偉い神官だったそうで、呪いを受けた姫が亡くなった時、不憫に思った神官がここに一緒に入ったそうです。

彼は死んで埋葬されたものではありませんでした。自ら望んで生きたままこの石棺に入ったそうです。

「そうか。今はこの神殿を詣でるものも居ないのか。・・・まあ、それはよい。それが時の流れというもの。」

「しかし、お前達はまだこの神殿の先を行くのだな？」

アランは頷きました。

「それなら、姫を頼む事にしよう。私は姫を救えなかった。お前たちならばあるいは・・・」

「これは、石棺の鍵・・・これなくして姫の石棺は開かぬ。・・・それと、その娘よ。」

アランは鍵を受け取ります。小さな金の鍵です。

サリナは、なに？って感じで神官を見てます。

「お前は低位ではあるが魔法を使うことができるな？私の力を授ける！」

そう言ったとたん、神官の周りに何かがモワ！と溢れます。それは大きな塊となって神官を離れ、サリナの体に吸い込まれていきました。

「お前に与えたのは癒しのわざ。怪我等を治す（ヒール）と毒に効果のある（パラル）だ。お前達の旅の助けになろう。」

最後にそう言うと、神官の体が少しずつ消えていきます。

神官の体からの光が弱まるにつれその姿がどんどん掠れていきます。

「秘密の部屋・・・石棺の中は空っぽ・・・」
サリアが地図に部屋の位置を記載してます。
これで、地下2階の探索は終了しました。
2人は、地下に降りる階段に急ぎます。

トカゲ戦士と武器の改良

マウント・ワン地下2階の探索を終了して、地下3階への階段を恐る恐る降りていきます。

2人は降りた途端に思わず立ち止まってしまいます。だって、このフロアは途轍もなく広い、1つの部屋だったのです。

「炎球【ファイア】！」

サリナが部屋の奥に向って火の玉を放ちます。

ビューンって周囲を明るく照らしながら飛んでいくと奥の壁に当たって一瞬あたりを明るくして消えました。

「広い・・・」

「そうだね。それと柱がある見たいだよ。」

さて、どうやってこのフロアを探索しようと悩んでいると、サリナがバックの中から、ランプを取り出しました。

階段の欄干に紐で縛り付けます。ランプの下突起を操作すると、ランプに明かりが点きました。

どうやら、ランプの中の魔道石が光っているようです。

「目印！」

「うん。これで、迷子にならずにすむね。」

とりあえず、サリナがファイアを放った方向に進みます。

壁に当たると、右に折れて進みました。先ずは一周して全体を把握するつもりです。

遠くにほのかにランプの明かりが見えます。

ランプの明かりの方向と、途中の柱、それに2人が歩った凡その歩数で部屋の大きさがある程度把握できます。

2人の歩く周りは、サリナの光球【ライト】により明るく照らさ

れています。

「！」

前を歩いていたアランがサリナの前に手を上げて、停止を合図します。

柱の影で何か動きました。

アランは杖の先にあるナイフのケースを抜いて杖の中間を持ちます。サリナも【フィア】を何時でも放てるように杖を握り直します。柱の影から人影のようなものが飛び出します。

間髪を入れずに【フィア】が放たれ、アランも杖を振り上げて走り出しました。

走るアランの真近で【フィア】が弾けます。

その時アランが見たものは・・皮鎧を身に着け、片手剣を持った二本足で立つトカゲ戦士でした。

【フィア】が命中したせいで皮鎧が焼け焦げ、肉の焼ける嫌な匂いがします。

そんな状況をまるで感じないように、トカゲ戦士はアランに襲い掛かります。

斜めに切り下ろされた片手剣を杖で上に弾き、回し蹴りを連携で叩き込みます。

しかし、トカゲ戦士はアランより少し大きい体格なので、その程度ではびくともしません。

危うく足を掴まれそうになり慌てて体制を取り直します。

そこに、【フィア】が再度トカゲ戦士に当たります。

前回とほぼ同じところに当たったのでしょうか、トカゲ戦士は痛みを堪えるように一瞬前屈みになりました。

「ヤア！」

その隙を逃さず、アランは渾身の力を込めて、トカゲ戦士の首の付根にナイフの刃を思い切り叩きつけました。

シュー・・・

トカゲ戦士が消えていきます。そして片手剣が残ります。

「ありがと・・・でも、この武器じゃちよつと心もとないね。」

「帰る？」

2人はマウント・ワンを出ると村に帰ります。

村では先ず、ギルドです。

アランはここで確認したいことがあったのです。

カウンターのお姉さんに、指輪の鑑定をしてくれたドワーフのお爺さんと呼んで貰いました。

「おう、坊主か。何か見つけたのか？」

ドワーフのお爺さんに話します。

貰った杖は使いやすいんですが、ナイフの切れが今1つであること、斬り込む時に刃が短いのと軽いので威力があまり無いこと・・・

「だろう・・・やはり中途半端ということだな。」

「でも、使いやすいのは本当なんです。もうちよつとナイフの長さがあつて、重量が増せばと思つて来たんですが・・・何とかならないかと思つて・・・」

「ふゝむ・・・所で、お前の持つてるものは片手剣だな？それを寄越せ。そして明日取りに來い！」

お爺さんは何を思つたか、アランが迷宮から持ち帰った片手剣を要求しました。

それを受取ると、事務所ではなくギルドの奥のほうに行つてしまいました。

「ガラムさんはね。昔は王都で有名な鍛冶屋してたのよ。今でも気が向いたら武器を造るんだけど・・・アラン君、気に入られたみたいね。」

お姉さんがお爺さんの消えた奥を見て言いました。

次の朝、2人でギルドを尋ねます。

少し遅い時間なので、ギルドに他の冒険者はいません。皆さん依頼を受けて出かけたみたいです。

「あら、遅かったわね。ちょっと待って！」

お姉さんが事務所向います。

「おう、来たか。これを持って見る。」

アランは、短くズングリした槍を受け取りました。ちょっと重いです。

かなり変わった槍です。第一、穂先がありません。上の方が片腕の長さ程、金属の板が出ています。でも、刃は付いていません。

呆氣にとられて武器を見ているアランをお爺さんはニコニコしながら見てます。

「どうだ！お前の欲しがってたものだ。」

「その柄についている輪の下を持って・・・そうだ。そしてもう片方の手で輪を下げてみる！」

すると、柄の上のほうに出ていた板がバチンと跳ね返えるように柄の上のほうに開きました。

そして、姿を現したのは・・・柄の長い片刃の片手剣です。

柄の中ほどを持って構えてみます。・・・問題ありません。

ホールの方に少し移動して、突き、斬りとナイフ付き杖での戦闘動作を一通り試してみました。

絶妙のバランスです。最初、重いと思いましたが、それほど気になりません。

「すごいです！・・・でも、僕達お金があまり無いんですが・・・どれほどでしょうか？」

「なに、金等いらんわ。・・・今度来る時、感想を聞かせてくれ

ればそれでいい。」

お爺さんはそう言って事務所に入っていました。

「よほど、気に入られたみたいね。その武器・柄の部分だけど、鉄と同じ位の強さがあるの。その値段だけでも、長剣が1本買えるぐらいよ。」

「がんばってね!」

手を振りながら送り出してくれたギルドのお姉さんを後にして、2人はマウント・ワンを目指します。

地図作りと注意力

何時ものように、朝早くサリナがアランの家を訪ねます。

お母さんは何時ものようにサリアを中に入れ朝食を食べているアランの隣でお茶をご馳走します。

アランがようやく食べ終えてお茶を飲んでいると、お母さんが、2人にお弁当を手渡します。サリナは大事そうにカバンにそれを詰め込みました。

2人のカバンには予備の食料や、薬草、毒消し等と水筒も詰まっています。今日は、地下3階を攻略し、更に地下4階も出来れば・・と思っっているからです。

「いつてきます！」と家の戸口で挨拶してマウント・ワンに歩き出します。

マウント・ワンに着いたら、早速地下3階の階段まで一直線に歩きます。途中、スライムや噛付き蛇が出ましたが、アランの新しい武器で叩きつけると一発で倒すことが出来ました。

「いよいよだね。」

サリナが軽く頷くのを確認して、地下3階への階段を降りていきます。

地下3階フロアに着くと、前回と同じように壁伝いに部屋を確認します。降り口を魔法のランプで目印にし、柱の影に注意しながら進みます。

アランは杖代りに使っていた武器の留金を外して片刃の剣を飛び出させます。柄の極めて長い両手剣のような武器ですが、剣自体は片手剣の刃の長さです。でもアランは使いやすいように感じてます。

しばらく進むと壁に当たります。また右に折れて歩き出します。どうやら壁から20歩ぐらいの距離で壁に平行に柱が立ってるようです。

柱は直方体で1辺がアランの両腕を伸ばしたぐらいの幅です。

サリナは【ライト】の魔法で3個の光球を出し、前後に1個ずつ浮かせると同時に、もう1個をランダムに部屋の中を移動させます。

こうすることで、魔物の不意打ちを避けられるかも知れませんが、部屋の全体像を確認するためにも役立ちます。

部屋の1辺に幾つ柱があるかを確認するため、地図と部屋の柱の位置関係を見ていたときに、他の柱と違う柱が有ることに気付きました。

とりあえず、その柱を地図上に書き込んで置きます。

部屋の4辺を歩きました。

柱の影に小さな箱がありましたが、中には銀貨が2枚はいつていだけです。

部屋の中心部も歩いてみましたが、何もありません。今回は、魔物さえも見当たりませんでした。

「何もないね。何か気がついた？」

アランの問いかけに、サリナが柱の1本を指差しました。

「あれ！他と違う。」

アランには違いがよく判りません。でもサリナが違うと言っからには何か有るはずです。

サリナが示した柱をよく見ようと近寄った時でした。

「ガウウ・・・」

低い唸り声を上げてトカゲ戦士が飛び出しました。

広い部屋を満遍なく探したはずなんですが・・・何処に隠れていたようです。

「ウオオリヤー！」

アランは斜めに持っていた武器を振り上げながら柄の石付きで、剣の一撃を弾きます。

振りかぶった武器をトカゲ戦士に叩きつけると・・・柄の長さでスピードの増した剣の刃が相手の首筋に命中しました。

「ズン！」

鈍い音と共にトカゲ戦士の首から血飛沫が上がると床に倒れ落ちました。

シューッと音を立てて、トカゲ戦士の亡骸が消えていきます。そして、チャリンと硬貨が数枚転がります。

改めて問題の柱を調べます。

「他と同じじゃないかな？」

「違う。他は、床から柱が伸びてる。これは、台座がある。」

そう言われて見れば、確かに床に指の幅位の高さですが台座があります。

台座をよく見ると、硬貨程の大きさの突起が台座の一边に付いていました。

足で踏んでみます。

ガコン・・・ガコン・・・ガコン・・・

柱で囲まれた部屋の中心部が正方形に、階段状に内側に向って落ち込み始めました。

そして、その中心部に新たな地下へ降りる階段が出現します。

「降りるよ！」

サリナは小さく頷くとアランの後を追います。

地下4階は、迷路のような通路が続きます。

先ずは全ての十字路と丁字路を左に進みます。もちろん分岐路には目印を付けて帰路が判るようにはしておきました。

「此处、さつき通った。」

「え！」

分岐路の片側を見ると、帰路を示す目印があります。

サリナが作った地図を見ると、少し位置がズれていますが、曲がった回数と方向で確かに此处と繋がっているようです。

「この距離がもう少し短かったんだな・・・サリナが地図作ってくれて助かったよ。」

いい。なんて言ってますけど、褒められて少しサリアの顔が赤くなりましたが、アランは気づいていません。鈍いんですねえ。

地下4階フロアは通路が複雑に繋がったフロアでした。

一通り、左側を選びながら進んでいると、最初の階段があった通路に戻りました。

次は左側を選択することになりますが、ここでちょっと一休みです。

お母さんの作ってくれた、平べったいパンには野菜と高価なハムが挟んであります。

アランが迷宮探索で得たお金で少し購入したみたいですが・・・ふと、アランは前にハムを食べたのは何時だったろうなんて考えてしまいました。

パンを食べて、水筒のお茶を飲みながら、2人でサリナの作った地図を確認します。

「先ず、こつちから行こうよ。この右側の空白が大きいのが気になるんだ。」

「此処から始める。どっちみち全てまわるから・・・」

サリナに従うことにしました。左側に進んで最初の分岐を右に曲がります。

しばらく進むと2箇所程直角に曲がって、その先は行き止りでした。壁に小さな長方形の窪みがあり、木の箱が置いてあります。

アランが恐る恐る蓋を開けると、中に小さな薬ビンが入っていました。ラベルが張ってありますが、2人には読めません。とりあえずサリナがカバンに入れときます。

次の分岐は十字路ですから直進します。

何回か道を曲がると、以前目印を付けた分岐に出ました。

そして、問題の分岐路です。

アランは何か胸騒ぎを覚えました。真直ぐな道を進むと、左に曲がり、また右に曲がります。

すると、このフロアで始めての扉を見つけました。

扉の前で聞き耳を立てますが、扉の向うからは何の物音もしません。

扉をそつと開きます。サリナが素早く光球を中に滑り込ませました。

水中から出現する通路

サリナが素早く光球を中に滑り込ませ、その後をアランが武器を構えて入ります。

「！」

そこには、頭の2つある蛇が静かにアランを見つめていました。サリナも部屋に入ります。やはり蛇の姿に驚いているようです。

驚いて、身動きできないでいるアランをチラッと見るとサリアが呪文を口にします。

「メル・（待て！）」

サリナは驚きました。呪文途中で思念の波が言葉となって頭の中に入ってきたからです。

（娘よ、驚くにおよばず。我は、遙か彼方より此処に居る者。何ゆえに此処に來たか答えよ。）

サリナは訳を話します。アランが此処を見つけた事。14歳になり一緒に冒険者になったこと。この迷宮を探索行つ事で今までよりましな生活を送れること・・・

（生きる為であれば、それも立派な理由と言える。此処は、この墓所の唯一敵の寄り付かぬ場所故、ここでしばし休むが良い。）

「ここで、少し休めって言うてるわ。」

「でも・・・」

「大丈夫、あれは敵じゃない。」

双頭の蛇の許可を得て、少し此処で休むことにしました。

でも、許可が取れない場合はどうなるのでしょうか・・・

（お前達については、許可しよう。何時でも来るが良い。他の者

は、その時に考えるとしよう・・・)

サリナは此処までの道を地図に書き込みました。この部屋については使用者を選ぶ休憩所と書き込んでいます。

一休みした所出先に進みます。

また、分岐に戻り、通路を進んでいきますと、下への階段を見つけました。この先は地下5階です。

サリナが地図で分岐箇所を再確認します。どうやら、全ての分岐を確認し終えたようです。

「この階はすべて見た。」

「じゃあ、下に下りるよ。」

2人は恐る恐る地下5階に降りていきます。

今までと違い、やたらに長い階段です。今までなら、2階分位の長さです。

そして、ようやく辿りつきました。

「「ええ!!」」

そこは、広大な水面が広がっています。

2人はテラスのように水面に張り出した、アランの身長10人分位の幅を持つ石の広場にいます。

広場の周囲は階段のように石段が水中に延びています。

高い天井からの僅かな照明で黒い水面が鏡のように反射して、かなり遠方まで見る事が出来るのですが、対岸の壁を見る事は出来ません。

シュッパ・・・っと、サリナが光球を真直ぐに打ち出しましたが、光球はずつつと遠くまで飛んで行き、やがて見えなくなりました。

「なんか、とんでもない広さだね。」

「果てがないみたい。」

ここで、迷宮は終わりなのかな？つと疑問を持ちましたが、ひょっとして何か仕掛けがあるのかも、広場をくまなく知らべました。

「あれ、この石周りと色が違うぞ！」

「この石も変！」

広場は、石畳です。およそ腕の幅位の正方形の切石が行儀良く敷き詰められているのですが、2箇所だけ、周囲の石と全く違う石が使われていました。

石を叩いてみても変化はありません。表面に文字も・彫ってありません。

「サリナ！この石、文字が彫ってあるけど・・・」

「・・・参・・・」

「どう言う意味？」

「判らない、まいるって読めるけど・・・」

アランはその文字を押してみました。すると石が少し動きます。乗ってみました。アランが乗ると、石が少し沈むのが判りました。

「サリナ、向こうの石に乗ってみて！」

サリナはとことこと走って行き、さっきの石の乗ってみます。

ガタン！と何かが動きました。

続いて、目の前の水面からザバー・・・と石が水面を割って飛び出します。

ザバー・・・ザバー・・・

次々と石が水面に浮上します。

そして、静寂が訪れると、そこにはアランの身長程の横幅を持つ、

石の道が水面にあらわれました。

「行くよ!」

アランに続きサリナも水面に現れた道を歩き出しました。石の道と水面はの距離は極僅かです。水面が波立ったら道は水浸しになるような感じの道が真直ぐに続いています。

念のために、光球を頭上高く上げておいて周囲を明るくしておきます。

ザバン・・・

何かが遠くで跳ねたようです。

2人は顔を見合わせると、駆け出します。

ザバン・ザバン・・・

水面を跳ねる音が近づいてきます。

2人は走るのを止めて、息を整えます。先ほど、水面が跳ねた時、そこに黒い影があることに気が付いたからです。

決して、見方とは思えません。周りは水面ですが、この狭い道で戦闘は避けられないみたいです。

ザバ!つと前方で音がすると同時に、得体の知れない怪物がアランの前に現れました。

魚と人間を合体させたような怪物です。でも、人魚ではありません。どちらかと言うと・・・半魚人。顔は魚で両手両足を持ち、全身に鱗があります。頭髮は無く、頭の天辺から背中に棘のある鰭が続いています。

全身が青白く、蛙のような手足には水掻きも付いてるみたいです。そして、手には短い槍を持っていました。

アランは杖の金具を下げて剣を飛び出させます。サリナも杖を構

えます。

ギイイー！っという叫びを上げてアランに飛びかかってきました。体形に似合わず素早い動きです。

アランは鋭い槍の突きを杖の石付でかわします。連係で剣を相手に打ち込みますが、半魚人は素早いバックステップでそれを回避しました。

半魚人の突きをアランが杖を打ちつけてかわし、アランの攻撃を相手がステップでかわす・・・

長く続くと思われた戦いにピリオドを打ったのはサリアでした。

アランの上段斬りをバックステップで避けた所に、サリナの【フイア】が炸裂しました。

ギユアア・・・と、顔を直撃された半魚人が叫びます。

そこに、アランが再度上段斬りを肩口に叩き込みました。

シュー・・・と音を立てて怪物が消えていきます。チャリーンっと硬貨が転がりました。銀貨です。

更に道を進むと、アランの身長の3倍程の横幅を持つ広場に出ました。道は見当たりませんし、下に下りる階段もありません。

でも、広場の真ん中に大きな壺があります。

「中には何も無いみたいだ。」

アランが杖を壺に入れて確かめています。

「これ！」

サリナが、何かに気がつきました。階段の降口にあった石板と同じように、石畳の石の色が違う場所があるのです。

アランは前と同じように石板に乗ってみました。確かに同じようにちよっと沈み込みます。

でも、ここの石は3箇所です。

どうしたものかと悩みましたが、アランが壺を目にした時、気がつきました。

アランは壺を持ち上げ広場の端に寄って水を汲むと、その壺を色の変った石板の上に載せます。

そして、自分も他の石板に乗りました。

「サリナ、その石板に乗ってみて。」

「わかった。」

サリナが石板に乗った途端、目の前の水面からザバー・・・っと石が水面を割って飛び出します。

さらに道が続きました。

移動用魔方陣

濡れた石の道を2人は歩いていきます。

先ほど歩いてきた道とは右方向に90度変わっています。

そして、また広場に出ました。

広場の石畳に前と同じような色の変った箇所が1つありました。

アランがその上に乗ると、今度は左側に石の道が水中から顔を出しました。

何回か、行き止まりの広場で色の違う石を踏みながら進んで行く
と、今までの広場と違い、高さが2段になっている広場に出ました。
3段の階段を上がって、広場の上段に行きます。すると、今までの
倍以上の広さを持つ広場には、身長程の円柱が4本立っています。
そして、その中には3つの魔方陣がありました。

「移動用魔方陣・・・」

それまでジッと魔方陣を観察していたサリナが呟きます。

「何処へ行くの？」

アランの言葉を聞き流すようにサリナは魔方陣を見比べています。

「これは、戻り・・・これは、進む・・・そしてこれは、帰着・・・」

「進むは先に行けるんだよね。戻りって何処に戻るんだろ・・・それに帰着って、どこから帰着するの？」

「解らない・・・でも、これだけじゃ魔方陣は作動しないわ。」

「発動させるために、何かいるってこと？」

サリナが頷きました。

2人は周囲を探しはじめました。どんなものかは解りませんが、

何か有るはずです。

広場の敷石を調べていたアランがふと顔を上げたときです。

4本の柱の内、1本だけ少し模様が違っていました。他の柱に彫刻された小鳥は飛び立つところですが、1本だけは降り立つところなのです。

不思議に思い、その降り立つ小鳥を近くに寄って見てみると、何かを咥えています。

指で触れると、チャリンっと音がして何かがこぼれ落ちました。

アランはそれを拾うとサリナを呼びます。

「指輪・・・多分これが発動キー」

サリナが指に着けようとするのとブカブカです。アランが右手の小指に着けました。

これで、動くはず！と2人で魔方陣の上に乗ります。

アランが乗ると魔法陣がパーっと光を放ちながら回転していきま
す。そして、そこに下に降りる階段が現れました。

「進むは階段なんだ・・・」

【進む】とサリナが言った魔法陣は階段に変わりました。階段から広場に移動しても階段は消えません。

「次は、これにしよう！」

2人は【戻る】と言った魔方陣に乗りました。

さっきと同じように魔方陣が光り、そして周り始めます。光は段々強くなり、やがて真っ白になりました。

直ぐに光りが弱まり、周りが見えるようになりました。

そして、2人の目に映った風景は・・・マウント・ワンの入口の広場でした。

「戻った！・・・」

アランが吃驚して声を出しました。

確かに、入口広場です。外に這い出る梯子もあります。

時刻は夕暮れ時のようです。このまま戻ると闇の中の山道を歩く事になります。

「ここで、野宿するよ。薪を取ってくるから此処にいてね。」

サリナにそう言い聞かせると、梯子を上って急な斜面で薪を探します。

ある程度薪を集めると、蔓で束ねて背負います。何度か斜面を転げ落ちそうになりましたが無事、薪を集めてサリナの待つ広場に帰る事が出来ました。

広場に戻ってみると、サリナが広場の一角にジッと立っています。アランは急いでサリナのところに行くとサリナの視線の先を見ました。

するとそこには、さつき地下5階で見た魔法陣と同じような模様が広場の敷石に刻まれています。

広場に積もった枯葉で今まで判らなかったのですが、サリナが焚き火の準備をするため広場の枯葉を片付けたので出てきたみたいです。

「これは？」

「【進む】」

2人で魔方阵に乗ってみました。

さつきと同じように光りながら魔方阵が回転して、白い光りに包まれます。

光が弱まると、そこは、水に浮んだ広場です。周りに4本の柱が立っています。

下を見ると、サリナが【帰着】と言っていた魔方阵の上に乗って

います。

どうやら、地下5階の魔方陣を使うと地上階と地下5階を一瞬に行き来できるみたいです。

2人はもう一度入口広場に戻ると、野宿の準備を始めました。

枯葉を退かして敷石の上で焚き火をします。

小さな鍋に、乾燥させた野菜を入れ、干し肉をナイフで刻みながら入れてしばらく煮込むと、美味しいスープの出来上がりです。

焼き固めたパンをスープに浸しながら2人でお食事です。

夜は焚き火の火を絶やさないようにしながらマントにくるまってお休みです。

何時の間にか、うとうとと眠っていたようです。

ふと気がつくと辺りは明るくなっていました。

地下5階には何時でも行けるので、一旦村に戻る事にしました。山道をトコトコと歩き、村に戻ると最初にギルドに行きました。ギルドで手に入れたものを鑑定して貰うのです。

「あら、いらつしやい。」

ギルドのお姉さんが挨拶してくれます。

鑑定をするドワーフのお爺さんと呼んで貰うと、早速、薬ビンの鑑定をお願いしました。

「ほおー、今時珍しいものじゃ。・・・これは、極上の回復薬だ。どんな状態でも一発で元に戻る。魔法使いは魔法力が元に戻るし、戦士なら瀕死の重傷でも元に戻る。」

「買って頂けますか？」

「もちろんじゃと。・・・そうじゃな。・・・金貨1枚で如何じゃ？」

2人は直ぐに承諾しました。始めてみる金貨です。ピカピカに光ってます。

「それで、この前頂いた、この武器なんですけど・・・」

「やはり・・・だめか。」

「いえ！そうじゃなくて、少し改良して頂けないかと・・・」

「うん？・・・何処じゃ？」

「この剣の部分の先端なんですけど、片刃ですよ。そこで、此方側にもこの位の範囲に刃をつけて貰えたらと・・・」

「理由は？」

「槍としても使えたらと・・・今のままだとどちらかと言うと長めの剣ですが、これだけ長さがあるんですから槍のようにも使いたいです。」

「判った。明日取りに来い！金是要らん。」

アランとお爺さんの話をお姉さんはニコニコしながら聞いてました。

「ほんとに気にいられたみたいね。」

「こつちにいらっしゃい。レベルの確認をしますから。」

2人は、前のようにお姉さんが取り出した水晶球を代わるがわる両手で掴みました。

そして2人から預かったカードを箱の中に入れます。

そして、箱からカードを出すと内容を確認しました。

「ふゝん・・・頑張ってるみたいね。レベルが6まで上がってるわ。これだと・・・アラン君は簡単な魔法なら3回程度は使えるよ。サリアちゃんは、全体魔法も使うことができると思うわ。レベルから1を引くと迷宮攻略の階数がわかるって言うけど・・・アラン君達はどこまで行つたの？」

「その言葉の通りで、今地下5階です。」

「そうなんだ。でも、無理はしないでね！」

お姉さんに別れを告げて2人は自宅に戻りました。
今日は迷宮探索を止めて1日休息です。

長柄とオーク

次の朝、サリナが何時ものようにアランをむかえに来ました。アラン達は早速ギルドに向います。昨日頼んだ武器を受取らなくては迷宮探索は無理ですからね。

ギルドの扉を開くと、お姉さんが待っていました。ドワーフのお爺さんが武器を取り出します。

「これで、良いじゃろう。少し刀身の厚みを増してあるが、そうしなければ刺した時に折れてしまう。開いてみる！」

アランは杖の上に付いているワツカを外します。ビュン！っと刀身が飛び出しました。刀身の先だけは両刃の剣のようになっていますが、その他は前と同じです。刀身を厚くしたと言っていました。がさほど気になりません。今まで通りに振り回せます。

「どうじゃ？」

「ありがとうございます。十分です。」

「そうか・・・それで、なんだが・・・その武器に名前を付けたい。」

【長柄】とな。」

「解りました。【長柄】ですね。」

2人はギルドを出て行きます。

「ようやく、名を残す機会が得られたわい。」

「お爺さんの夢でしたからね。」

ギルドの2人はそんなことを言いながらアラン達の無事を祈りました。

マウント・ワンの入口広場に着くと早速、【進む】の魔方陣に乗

ります。

2人を光りが包むと、地下5階の水の広場に出ます。そこにある、地下6階への階段を恐る恐る降りていきます。

地下6階に下りると直ぐにサリナが光球を2つ頭上に出現させました。

そこは、広い空洞でした。階段を降りたところは石畳の広場があります。そこから、岩だらけの風景がひろがっています。その中に、街道のように道が続いていました。道はアランの身長ほどの横幅がある石を連ねて出来ています。

2人が最初の石に乗ったときです。

石が光ったかと思うと浮き上がり、2人を乗せて石の上を滑っていきます。どうやら魔法で2人を運んでいるようです。

道は一本道で、わき道はありません。

少しの間乗っていると前方に丘のようになった所があります。どうやらそこに運ばれているようですが・魔物の姿もそこにはありません。

リユーイは長柄のワツカを降ろして刀身を出します。サリナも杖を構えて何時でも魔法弾を発射できるように構えます。

そこに居たのは、豚の鼻を持つ子鬼のオークです。

片刃の剣を持ってアランに向ってきました。

【ファイア！】

ゴオーッと炎の塊が走ると、オークの顔面にぶつかりました。

あまりの熱さにのけぞったオークの首筋を狙って、アランの長柄が切り込みます。

グエエ・・・

醜い声をあげながらオークは斃れました。

次のオークも向ってきます。奥に居るオーク達も此方に来ます。サリナは炸裂弾を取り出してオークの群れに放り投げました。

ボン！つという音と共にオーク達が倒れました。すかさずアランは長柄で首の付根を突き刺します。

さらに向ってくるオークには長柄を振り回して牽制します。

そこをサリナが【ファイア】で攻撃します。

連係を取りながら数匹のオークを無事退治することができました。

サリナがオークの落とした硬貨を拾っていると、鍵が落ちていることに気がつきました。

とりあえず、カバンに入れておきます。

「全て銀貨。」

苦戦しましたが、成果はあったようです。

丘の上を調べます。オークがたむろしてる位ですから、なにかあるかも知れません。

岩の陰に2つの箱がありました。

片方には綺麗な腕輪が入っています。サリナがきれいといいながらカバンに入れました。

もう片方には鍵がかかっています。

さっきの鍵を取り出すと、ピタリと合います。

鍵を外し、箱の蓋を開けると、丘の一部がゴゴゴゴ・・・と音を立てて岩を持ち上げました。

どうやら、地下6階への階段のようです。

地下6階へ行く前に少し休息です。

オークは強敵でしたがこのフロアが一番楽にクリア出来ました。

でも、次もそうだとは限りませんからね。

休憩を終え、階段を降りていきます。降りたところで、サリナが光球で辺りを照らすと・・・規則正しい通路がそこには並んでいました。

降りた所から横に長い通路があり、そこから縦に6箇所程通路が

あります。通路の横幅は今までと同じようにアランの身長ぐらいです。

とりあえず左端から探索開始です。

出来るだけ、左によって縦の通路に向きます。

サリアは【ライト】で光球を追加し、前方に飛ばします。ヒューンと飛んでいって止まりました。この通路は行き止まりのようです。

周囲を観察しながら恐る恐る歩いていきます。

突き当たりまで来ましたが何もありません。横道もありませんでした。

ゆっくり歩きながら横道まで戻ります。そこでサリナが紙にこのフロアの地図を書きます。一つ目の通路を書き、何も無いと書き込んでます。

次の通路です。同じように【ライト】を使用します。さっきより短い距離で光球が止まりました。

やはり行き止まりのようです。進んでいくと行き止まりではなく右に曲がる通路になっています。でも、その先はＴ字路になっていました。

横に進んだ距離を考えると次の通路に繋がっているようです。床に印をつけて、元の道を辿りました。

縦に並んだ３つ目の道を進んでいます。途中で左へ曲がる道がありました。印がついてます。やはりさっきの道と繋がってます。更に進むと左へ通路が続いてました。その先は行き止まりですが、壁にレバーが付いてます。

アランは散々悩んだ末にレバーを下ろしました。その際にサリナは地図を描いてます。

元の横道まで戻り、次の道を進みます。

今度は途中に横への道がありました。印をつけて更にすすみます。するとさっきとは逆の方向に道が続き同じようにレバーが壁に付い

てます。

アランは迷わずにレバーを降ろしました。すると、どこかで、ボタン！と扉が開く音がしました。

元にもどって、次の通路を進みます。やはり予想通り途中で左に折れさつきに印のところに出了ました。急いで戻ると最後の通路に入ります。

通路は真直ぐに続いていました。今までよりも遠くまで光球が飛んでいきました。

通路の先は左に折れて続いています。

2人は周囲をよく見ながら進んでいくと、T字路に出了ました。印を付けると先に進みます。すると、通路は左に折れ更に続きます。そして、最初の横道に出了ました。

サリナが地図を確かめてます。どうやら、2つのレバーを操作した事で、新たな道が出来たみたいです。

とすると、更に先へ進むにはさっきのT字路を進むことになりそうです。

2人は急いでさっきの場所へ戻りました。

印のついたT字路に戻ると左に折れて進みます。

サリナの作った光球もずっと遠くで止まっています。

途中に扉がありました。

中からずりっずりっとなにかを引きずる音がします。

アランとサリナは顔を見合わせました。サリナはカバンの中から何やら取り出します。

アランがそうつと扉を開くと、その隙間からサリナが小瓶を中に投げ入れます。急いで扉を閉めると同時にバン！という大きな音と共に強い光りがドアの隙間から漏れました。

武器を構えてそうつと扉を開き中を覗きます。

そこには下半身が蛇になった女性が目を回していました。

敵がどうかわかりません。とりあえず武器を構えて気がつくのを待つことにしました。

「ふえ．．酷い目にあつた．．．あんだ達ね！今度したらただじやすまないから．．．って武器さげてくんない？」

2人が武器を今にも使いそうになっていることに気がつき、途中からお願いモードになってます。

「誰？」

「誰って．．ミリアよ。此処にずっと住んでるんだけど．．入口を見つけたみたいね。それじゃ、此処ともお別れかな．．煩くなるし、やたらと挑んでくるし．．」

「行く当ては有るの？」

「無いけど．．その内また見つけるわ。ちょっと待ってね。」

ミリアと名乗った怪物は光りに包まれると普通の女性に姿を変えました。

「これで、外に出れるわね。持ち物は．．．これぐらいかな。後はあなた達にあげるわ。」

そう言つて部屋を出て行きました。

呆氣に取られて見てましたが、もう彼女は居ません。

部屋の中は小さな水溜りと蠟燭台があるだけです。

「これ！」

サリナが部屋の隅に小さな小箱を見つけました。

蓋を開くと、指輪のようです。サリナはバックに入れました。

部屋を出て先に進みます。

直ぐに下に降りる階段を見つけました。

サリナが地下6階の地図を書き込みます。さっきの部屋には．．もう誰も居ない．．と書いてました。

地下の砂地に潜むもの

地下7階に2人は降りていきます。

フロアに到着すると同時に、サリナは「ライト」を唱え、光球を頭上と前方に飛ばしました。

辺りが、サーっと明るくなります。

今度のフロアは地下3階と同じように大きな部屋でした。床が砂地である事が少し違います。

柱もあるんですが・・・傾いていたり、上部が破損したりしています。

よく見ると、何箇所か大きな岩が顔を出しています。床よりサリナの身長位高いでしょうか・・・岩に登ればこの部屋の全体が見渡せるかも知れません。

アランが近くの岩に歩き出そうとした時です。

「！・・・」

サリナがアランの服を掴んで引き止めました。

「下がって・・・【ファイア！】」

アランの足元に火炎弾を放ちます。

ジョア！って、何かが焦げる音がするとともに嫌な匂いがたちこめました。

よく見ると、体長が片腕程の大きなサソリです。

砂漠みたいに見えることから、住み着いているのかも知れません。

更に1匹のサソリが近づいてきました。

アランは長柄の先でブス！っと突き刺します。

サソリをよく見ると目がありません。・・・どうやって、自分達を

見つけるのでしょうか？

「ひょっとしたら・・・」

アランは足元の小石を拾うと遠くに放り投げます。

砂地にトン！っと小石が落ちた廻りの砂の中から、サソリが這い出てきます。

「音に反応するんだ。もしかしたら、砂に伝わる振動かも知れないけど・・・」

アランは階段近くの小石を沢山拾いました。サリナにも少し持たせます。

「あの岩から離れた所にメルトを撃つてくれない？そしたら、そこにサソリがあつまるから、あの岩まで安心して行けると思うんだ。」

サリナは杖をかざし、【メルト！】と叫びます。

火炎弾がスーっと勢いよく離れ、アランが指差した所に着弾すると、ドン！と炸裂します。

たちまち、付近のサソリが着弾地点にワサワサと集まりだしました。

「行くよ。足音を立てない様にね。」

2人はそろりそろりと岩に向います。途中、2人に向ってくるサソリもいましたが、アランが長柄で突き刺し、遠くに投げていきます。

ようやく、岩に辿りついた時です。ゴゴオォー！という音がサソリが密集している付近で聞こえたかと思うと、巨大な顎が砂の中から出現しました。

サソリを纏めて啜えると、ゴゴオ・・・と砂の中に潜って消えてしまいました。

「砂虫・・・」

「砂虫って、土の中に住んで、牛でも襲うっていうあれか？」

サリナが頷きました。

ちよっとヤバイのがいるようです。

岩に辿りつくと、岩の構造が少し変わっています。砂から腕の長さくらいは垂直に磨き上げられていました。

ヨイシヨって岩に登ると、ちよっとした家くらいの大きさです。

真ん中が高くなっているのでそこまで上り、部屋の状況を見渡します。

サリナが光球を追加します。

すると、この部屋の右奥の彼方に小さな広場と階段らしきものが見えました。

さらに、部屋の奥には広場までの小さな小道が有る事が分かりました。横幅が片腕程の小道ですが、砂地からの距離が有るので安全に通れそうです。

しかし、その小道までが問題です。

小道は途中にある岩に登れば通ることが出来そうですが、そこに至る砂地には、右手には、砂鮫の背びれが見えますし、左手には砂が大きく陥没しています。陥没した底では大きな顎がワキワキと音を立てています。

鮫のいる砂地はとても細かい砂のはずです。踏み入れたら、ズブズブと沈む事確実です。

鮫と蟻地獄の境界を縫って進むしか方法は無いようです。

アランの服がチョンチョンと引かれました。サリナが何か見つけたようです。

サリナの指先には岩と同じ様な色をした箱がありました。そつと蓋を開けると、板が何枚か入っています。板の真ん中には穴が2箇所開いていました。

「そうか！これで渡るんだ。」

アランはサリナに使い方を説明します。紐は箱の底に沢山入っていました。

2人は靴底に板を紐で括り付け、蟻地獄の窪地の廻りを少しずつ慎重に進みました。途中でサソリが這い出てきましたが、小石を蟻地獄の窪地に投げると、そちらに向っていきました。

サソリは途中で聞き返そうとしましたが、砂が崩れて落ちていく一方です。最後には、底で待っている顎がサソリを砂の中に運んでいきました。

何匹かのサソリを蟻地獄や砂鮫の方角に小石を投げて誘導して、ようやく小道に繋がる岩に辿りつきました。

狭い小道を2人はゆっくりと進みます。落ちたら、サソリと一緒に運命ですから、慎重にもなりますね。

小道を進み、小さな広場に着くと、地下に続く階段がありました。2人はサツサと階段を降りていきました。

地下8階は、村の道幅位の真直ぐな道でした。

サリナの放った光球が真直ぐ進んで階段らしき欄干を照らします。でも、途中に横道があるようです。

アランは長柄のワツカを下ろして、片手剣を出しました。サリナ

もいつでも火炎弾を発射出来そうです。

慎重に進んで最初の十字路に差し掛かります。

「ワァ！」と叫んでアランが左の横道に飛び込みます。

もし、右から敵が現れたら、サリナが火炎弾で応戦する作戦です。しかし、何の音もしません。

「こっちは行き止まりだ！」

アランはそのまま戻ると右の横道に入ります。

「箱を見つけた！」

箱を開けると、銀貨が5枚入っていました。

直ぐにサリナの所へ戻ります。

最後の十字路にきた時です。右側から微かにカシャカシャ・・・と言う音が聞こえます。

サリナは爆光球を取り出しました。

そっと右の通路に転がします。

ボオオン！と音と光りが溢れました。

右手に入るとサソリの外皮で作った鎧を着たトカゲ戦士が倒れています。

アランはすかさず、長柄を戦士の首に突き刺しました。チャリントという音とともに戦士の姿が消えて行きます。

奥に箱があります。開けると中には綺麗な象嵌を施したナイフが入っていました。

サリナがバックに収めます。

左手は行き止りで何もありません。

そして、地下9階に向います。

地下9階は球形の部屋の集合体でした。

1つ1つが丸い部屋です。そして、他の丸い部屋に繋がっています。

構造自体は最初の頃の部屋に似ていますが、光球を2個上げて置くと、部屋が白いせいでしょうか、眩しく感じられます。

そんな中にも、怪物はいます。

オークと出会い・・・トカゲ戦士と出会い・・・

今は、デツカイ鶏と戦っています。

鶏の動きは素早く、魔法も、アランの攻撃も中々当たりません。

鶏はくちばしと足の逆爪で攻撃してきます。

アランは大きな傷を受ける事はありませんでしたが、体中に無数の傷を受けています。

「エエイ！」

気合とともに振り払った長柄の刃が鶏の足を傷つけたようです。

みるみる動きが鈍くなった所にサリナの【フィア】が辺り炎が鶏を包みました。

「ヤアア！」

繰り出した長柄に体突き刺された鶏は硬貨を残すと消えて行きました。

フーッと息を吐くアランに治療魔法、【ヒール】を放って怪我を治します。

でも、ボロボロの服はどうしようも有りませんでした。

サリナと一緒

デッカイ鶏と戦ってどうにか勝利は収めました、アランの服はあちこち破れてます。

結構丈夫な生地なんだけどなあ．．ってアランは思ってますけど、魔物の攻撃力は侮れません。

球形の迷路を制覇して地下10階へ下る階段の脇に見たことのある魔法陣を見つけました。

迷宮入口へ戻る事の出来る【移動用魔法陣】です。

「戻る！」

サリナが魔方陣に入ります。アランが魔方陣に入ると光が2人を包み込み、あつと言う間に迷宮入口の広場の魔方陣に移動する事が出来ました。

2人はマル1日迷宮にいたようです。

入口に戻ると、太陽は真上を過ぎた辺り．．昼過ぎですね。

村に戻ると、早速アランの装備を変更します。

アランの住む村は山間の小さな村です。村人も300人位でしかありません。

そんな村ですがお店は1つあります。

俗に言う雑貨屋さんです。食料品から武器、防具まで何でも揃ってます。でも、良いものはありませんけど．．

「こんにちは！」

アラン達が店に入ると、店員のおじさんが出てきました。

「おお．．アランじゃないか！．．だいぶやられたようだな。」

「デッカイ鶏と戦って・・・何か動きやすくて、軽い鎧はありますか？」

「待つてな・・・」

おじさんはそう言うとお奥に入って行き、しばらくすると、皮の鎧を持ってきました。

「この店だと、軽い鎧はこれになっちまうな。後は、鉄の鎧だから重くて動きは制限されちまう。丈夫さは十分なんだけどなあ・・・」

「旅人が使うこの丈夫な服は、肘や膝等に皮を張ってある。この上に皮の鎧を着るんだ。奥で着替えてみる！」

アランは奥に行って着替えてみました。

以前着ていた服と同じような旅人用の服は、肩や肘等が2重の布になっていきます。その上、擦り切れそうな部分には鹿皮で補強されています。

皮の鎧は、丈夫な牛の皮が2重、3重に重ねて作られており、動きやすいように肩や、胴の部分は別のパーツを革紐でしっかりと繋がれています。

店に出ると、ほう！っておじさんに感心されました。良く似合っているみたいです。

サリナもアランを見て少し顔が赤らんでいます。

「ところで・・・値段は？」

「そうだな・・・銀貨20は欲しいところだが、18で良いぞ。」

防具の購入は初めてなので少しおまけしてくれるみたいです。

早速、サリナが支払って、ギルドに向かいました。

ギルドの扉を開けると、お姉さんに鑑定の依頼を頼みます。

お姉さんに呼ばれて奥の事務所から、ドワーフのお爺さんが出てきます。

サリナはカバンから、指輪を取り出しお爺さんに渡しました。
アランも指輪を外すとお爺さんに渡します。

お爺さんはしばらく指輪を見てましたが、台座に刻まれた文字を見つけると、奥に入っていました。

しばらくして戻って来ると、ゴツイ手の平に指輪を乗せてアランに鑑定結果を話します。

「・・・これも珍しいものじゃ。この指輪は転移と方向の2つの性質を持つておる。多分造った者は、そこまでしかこの指輪に機能を付加することが出来なかったのじゃろう・・・明日取りに来い。この指輪を合体してやろう。」

アラン達は、お願いしますと言って帰って行きました。

「しかし・・・中途半端な仕事をする奴もいるのぉ・・・なぜ、合体させなかったのじゃろう・・・」

「あえて、合体させなかったのでは？・・・2人そろわなければ入れないとか・・・」

「そうじゃのう・・・そう考えれば納得も行くが・・・そうすると、あの迷宮は何かを祭った物かも知れんな。」

「では・・・それほど深く無いと？」

「そうじゃ。もし、何かを祭った建築物だとすれば、深くて地下20階、通常なら地下10階程度じゃろう。・・・誰にも邪魔をされずに最終階まで到達出来るじゃろうて。」

お姉さんと、お爺さんは2人が出て行った、扉を見ながらしばらく話続けていました。

今日は、此处までということ、2人は道を分かれて家に帰りました。

まだ昼過ぎだというのに早々とアランが帰ってきたのでお母さんは少し驚きましたが、冒険者にはある程度の見切りが必要です。

もう無理！と思ったら、直ぐに引き返す。これが出来る冒険者が本当の冒険者だとお母さんは考えてましたから、こんなに早く帰ってきた事情についてはとやかく言うことをやめました。

「ご苦労さま。」と言いながらお茶を入れてあげます。

この所、アランの冒険者としての働きは順調です。それなりの収入を得てますから、もう、お母さんが無理をして働く事もありません。病気がちのお母さんの体調も以前よりずっと良くなりました。

「今日は地下9階まで行ってきたんだ。でも、デッカイ鶏に合つて、服がぼろぼろ・・・そんな訳で、お店で鎧を買ったの！」

アランはお母さんが聞きたかったことを話しました。

「アラン・・・無理はしないでね。サリナも一緒なんだから・・・時には逃げるのも勇気なのよ。」

お母さんは、まだ地下2、3階で戦つてるとばかり思っていたようです。深い地下にはその深さに応じた魔物がいます。ゆっくり確実に進むことが大事なんだとアランに諭します。

アランの家の扉をトントンと叩く音がしました。

お母さんが扉を開けるとサリナが立っていました。

お母さんは、サリナを招き入れると、アランの隣に座らせてお茶をご馳走します。

「どうしたの？」

アランは、聞いてみました。さっき、また明日。って別れたばかりだからです。

「お婆ちゃんが・・・行っちゃうって・・・」

サリナのその言葉でお母さんは此処に来た訳がわかりました。

魔法使いの老後は神殿で迎えます。

神殿は治療ばかりではなく、剣や鎧等に付加魔法を付ける場所でもあるのです。治療魔法は神官がこなしますが、付加魔法は神官では出来ません。

神殿は、年老いた魔法使いの老後の世話をする代償として付加魔法を魔法使いに行ってもらうのです。

サリナのお婆ちゃんはある程度の腕を持つ魔法使いです。付加魔法も低レベルであれば十分こなせますから神殿で老後を迎えることは悪いことではないかも知れません。

でも・・・そうすると、残されたサリナはどうするのでしょうか・・・

「サリナ・・・ひょっとして、お婆ちゃんが此処に来るように言ったのかしら？」

サリナは小さく頷きました。

私に託したということかしら？・・・でも、いくら冒険者でもまだまだ子供が1人で暮らすのは大変だし、この村にサリナを他に託せるような家も・・・確かに無いわね。アランのお嫁さん・・・少し早いかもしれないけど、何時かは貰うのだし・・・知ってる娘なら安心だね。

「アラン・・・サリナと暮らしたい？」

「冒険も一緒だし・・・もう一緒に暮らしてるような気がするけど・」

「じゃあ、問題ないわね。・・・サリナ。今日から此処で暮らしなさい。・・・お婆ちゃんには、確かに預かりましたと連絡してくない？それとここで暮らす準備があれば用意してきなさい。」

サリナはさつきと同じように小さく頷いて、アランの家を出て行きました。

「お母さん・・・サリナも此処で暮らすの？」

「そうよ。さつき貴方も一緒に暮らしてるようだ。と言ってたじゃない。貴方の未来のお嫁さんと思えば今から暮らすのも問題ないわ。」

そう言ってお母さんはどこかに出かけていきました。

そんな・・・ってアランは思っていましたけど、悪い気はしません。サリナは無口ですけど、よく気がつく娘です。

でも、この家には部屋が2つしかありません。サリナは何処で寝るのでしょう・・・

そんな心配をしてると、出かけていたお母さんが帰ってきました。

「すみません・・・ここから入れてくださいな。」

扉を開けると、外に向って言いました。

すると、雑貨屋さんのおじさんとお兄さんがベッドを運んでくれました。

よっこらしよって家にベッドを運び入れ、お母さんの指示に従ってアランのベッドの隣に据えつけます。

雑貨屋さんが帰るとアランの前にお母さんが座りました。

「今日から、サリナと一緒によ。娘ができたみたいでお母さんは嬉しいわ。・・大きくなって、アランのお嫁さんになってくれればもっと嬉しいんだけど・・」

「まだ、14だよ・・でも一緒に暮らせるのは嬉しいな。」

そんな話をしていると、扉を叩く音がします。

お母さんが扉を開けると、籠を背負って包みを両手に持つサリナが立っていました。

「お婆ちゃんが・・これを・・」

サリナが手紙と包みをお母さんに渡します。

後で読む事にして包みを開けると・・・花嫁衣裳です・・きつと、サリナのお母さんが着た物なのでしょう・・何時か、孫に着せてあげたいと、どんなに貧しくとも、手放さないできたようです。

籠ともう1つの包みはサリナの小物と普段着が入っていました。ぼろぼろ状態のものもありましたが、大切に使ってきたのでしょう、汚れは全くありません。

「此処が、貴方とアランの部屋よ。小さいけど・・仲良く暮らさない。」

お母さんはまた、家を出て行きました。

今度は、サリナの普段着を買ってきたようです。それと、丈夫な旅人用の服も買ってきました。だって、最初にあげた服をまだ着ていたからです。

女の子の買い物も楽しいわね・・お母さんはそう思うとちょっと嬉しくなりました。

棘の海

次の日の朝早くアラン達はギルドに向いました。

アランは真新しい皮の鎧の後腰に片手剣を付け、肩から小さな力バンを下げて、長柄を持っています。

サリナは、新しい黄色のシャツに旅人が着る厚手の上下服を着て、お母さんに貰ったマントを羽織っています。肩から下げているバツクはアランとお揃いです。そして、おばあさんの形見の魔法の杖を持っています。

靴は、皮のブーツですが、滑りにくいように厚い裏側には何本かの溝を刻んでいました。

ギルドの扉を開けると、カウンターのお姉さんに挨拶して、ギルドカードの更新をします。

お姉さんは、2人のギルドカードを受取ると、カウンターの下から水晶球を取り出し、2人に代わる代わる水晶球を持たせました。

「ううーん・・・少しレベルの上昇が早いような気もするわね・・・無理しないでね。」

2人はお姉さんからカードを受取ると、レベルの確認をします。レベルは12になっていました。レベルの確認と同時に内から力が沸いてきます。どうやら、水晶球を持つ事で、レベルにあった力が付加されるようです。

「ちよつと待ってね。呼んでくるから！」

お姉さんが事務所から、ドワーフのお爺さんを連れて来ました。

「おお・・・出来取るぞ！・・・これだ・・・移動用魔方阵の中で、この指輪を付けて念じれば好きな所に運んでもらえる筈じゃ。」

アランは有難く受取ると、ギルドを出てマウント・ワンを目指して歩き出しました。

山道を歩き、斜面を降りて、入口前の広場に出ます。

そして、移動用魔方阵に2人で乗ると、頭の中で地下9階と念じました。

たちまち、魔方阵が発光して2人を包みます。

光が薄れて、2人が目にしたのは地下10階に下りるための階段でした。

地下迷宮の薄暗い闇は、サリナの光球でたちまち明るく照らし出されます。

アランも、長柄のリングをずらして長柄の刃を伸ばしました。

そろりそろりと階段を降りていきます。

地下10階の踊り場に降り立ち、サリナはさらに2つの光球を天井に上げます。

部屋の全体がぱーっと広がりました。

その部屋は以前の水の部屋と少し似ています。

ただ、道の両側は身長程低くなっており、底には一面に掌の長さ程の棘が生えています。棘の海みたいです。

道の先には、アラン達が今いる踊り場程の大きさの広場になっていますが、中心部が高くなっているので先がどうなっているか判りません。

しかも、その広場には大きな狼みたいな怪物がいます。普通の大ささの3倍近くあります。

今いるところからは3つの広場が見えるだけですが、各広場に3匹以上いるみたいです。

「サリナ。・・・魔法で攻撃できない？」

こくと頷くと「メルダム！」と唱えます。

ビューン・・・と火炎弾がサリナの持つ杖から打出され・・・前方の広場にドドーン！と着弾すると盛大な炎が広場を覆います。

火炎が収まると、広場に動く気配はありません。

でも、その音に反応して、他の広場から狼が移動してきます。

「凄い、威力だね。・・・後何回出来るの？」

「レベルが上ったから・・・後5回・・・」

この先も、ありますからあまりサリナに無理をさせるわけにもいきません。

移動してきた狼が前方の広場に集まるのをひたすら待つことにしました。

アランは2人が並んで通れる位の道を前にして長柄を構えます。

何時、狼が道を走りこんで襲ってくるか判りませんからね。

サリナは踊り場を移動しながら部屋の全体像を調べようとしてますが、あまりつかめません。やはり目の前の広場まで行く必要があるようです。

しばらくすると、前方の広場に数匹の狼が集まってきたようです。しきりに此方を伺っていますが、道を走りこんでくるものはいないようです。

「サリナ。・・・もう1度、お願い！」

こくと頷くと、再び【メルダム!】と唱えます。

ビューン・・・と火炎弾がサリナの持つ杖から打出され・・・前方の広場にドドーン!と着弾すると盛大な炎が広場を覆います。

「行くよ!」

アラン達は棘の海に橋のようにせり出した道を歩いて、前方の広場に歩き出しました。広場は棘の海に浮ぶ島に見えなくもありません。

黒こげの狼の体からはまだブスブスと煙が出ています。

アランは広場に着くと同時に狼に止めを刺して行きます。

「えい!」と繰り出す長柄に突き刺された狼はチャリンという軽い音を立てて煙のように消えていきます。

8匹に止めを刺したアランは広場の真ん中まで上ります。そこは、アランの身長程の高さがあります。

銀貨を回収したサリナも上ってきます。

そこから見渡す部屋の様相は、・・・堀の無い迷路みたいです。

数箇所ある広場の山の部分で微妙に道が隠されています。

今いる広場からも、左右に道が続いています。

「どうやら、全部を回る必要があるみたいだね。」

「そうね・・・」

サリナはそう言うと、左側の道に向って歩き出します。

アランは慌てて後を追いました。左側の道の先にも広場があります。最初の魔法攻撃の後で此方に狼が走ってきたのを見ましたが、まだ残っていないとの保障はありませんからね。

アランはサリナの前に出ると、サリナに言いました。

「先行は僕！・・・サリナは接近戦が出来ないんだから・・・僕の後にいること！」

「・・・判った・・・」

どうやら、サリナはこの先の広場には狼がいないと判断して、先に向ったようです。でも、用心に越した事はありません。そんな事まで心配してくれるアランに少し嬉しくなりました。

今度の広場には、やはり狼はいませんでした。

広場の中央に立つと、奥に向って真直ぐに1つの道がありました。道の終端に何かあるみたいです。

早速、2人はそれに向って道を進みます。

「なんだ、これ？」

そこにあつたものは、レバーでした。

何かの仕掛けだと判断したアランはレバーを手前に引いてみます。ガコン・・・どこかで確かに、このレバーに連動したような音がしました。

最初の広場まで戻ると、サリナはカバンから薄い皮をとりだして、地図を作成します。階段と広場そしてせり出した道と仕掛け・・・廻りを囲む棘の海・・・

今度は、右の道です。先にある広場には動くものはありません。アランが先頭をゆつくりと歩いていきます。先にある広場には2つの道があるようですが、その道を渡ってくる狼はおりません。

広場まで後一步の所で、一旦立止まり、後のサリナに頷くと、一気に広場の中央に躍り上がります。

素早く周囲を確認し、何もいないことを確認して、サリナに手を振りました。

広場には何もありません。やってきた道に対して左方向に道が一本あります。

先に見える広場には・・・狼が此方を睨んでいます。

でも、姿を見せているのは1匹です。あまり、サリナの魔法力を消費したくありません。

アランは、長柄を構えてゆつくりと道を進んでいきます。その後には少し離れてサリナが続きます。

長柄の真ん中を肩幅程に両手を離し斜めに構えます。

こうすれば、長柄の先で切る事も、柄の石突で殴りつけることも可能だからです。

突然、狼がアラン目掛けて走り出しました。

飛びかかってくる狼目掛けてアランは長柄の石突で横薙ぎに払います・・・狼は体勢を崩され・・・道の下の棘に全身を串刺しにされます。チャリン・・・と音がして消えていきましたが、銀貨を回収する事は出来ません。

広場までもう少しという所で、一旦立止まりました。

サリナが【メルト】を唱えました。

小さな火炎弾が広場の裏側に着弾して一瞬火が燃え上がります。でも、何事も起こりません。

アランが一気に広場に移ると、素早く周囲を確認します。そして異常がない事を確認してサリナに手を振りました。

この広場には2つの道があります。

1つは先端に何かあるようですが、よく見えません。もう1つの道は別の広場に続いています。そこには狼がウジャウジャしています。

とりあえず、道の先端にあるものを確認しに行きます。足早に進み、たまにもう1つの道に狼が進んでいないことを確認します。

先端部にあったものは、先ほどと同じようなレバーでした。アランが手前に引くと、ガコン・・・と遠くでおとがしました。

急いで先ほどの広場に戻ります。

幻影の暮す村

地下10階の棘の海に浮ぶアイランド・・・広場はそんな感じですよ。

横幅は2人が並んで通れるほどの橋のような道は広場を結んでいます。

アランは2つ目のレバーを倒すと元の広場に戻って来ました。次の道を進むことになりましたが、その先の広場には狼が沢山いるみたいです。

「サリナ・・・出来る？」

「分かった・・・メルダム！」

広場の真ん中に盛大な火柱が立ちました。

アランは長柄を構えて広場に走ります。

まだ、息のある狼に長柄を突き刺して止めを差していきます。

チャリン・チャリン・・・銀貨の転がり落ちる音とともに狼は次々と姿を消して行きました。

広場からは壁の奥に向って1本の道が続いています。

そこには丸い穴が開いているようです。

アラン達は壁の穴に向って進んでいきました。

壁の穴の中には、下に向う階段がありました。

穴の直径はアランの身長より少し高い程度で、階段の横幅は1人分しかありません。

天井が低いので、サリナは光球を1個階段下に先行させました。その後をアランが下りて行きます。

最後に棘の海に浮んだ広場を振り返り、異常がない事を確認したサリナが下りていきました。

呆然と立ち尽すアランの見据える先をサリナは不思議そうに見つめました。

地下11階に広がる世界・・・なぜか村があります。
アラン達の村より立派な石造りの村です。十数軒の家々が何故か迷宮の地下11階にあるのです。

2人は用心深く、村の中央の通りを歩いていきます。
サリナは光球を更に2個上空に上げて周囲を明るく照らし出しました。
すると・・・

今まで、人っ子一人・・・鼠一匹居なかった村に・・・何かの気配が感じられます。

気配は段々と大きく・・・そこかしこから感じられます。

突然、左の家の扉が開き、子供の笑い声と共に何かが飛び出してきました。

キヤツキヤ・・・と笑いながら2人の子供が通りを・・・アランの前を走り抜けます。

・・・でも・・・子供の姿は輪郭だけ・・・体を通して向こう側が見えました。

「幻影魔法・・・」

「これが？・・・だって、家は・・・ほら、触れるんだよ！」

「家は本物・・・暮してるのは幻・・・」

「村を照らした光球で、発動したのかも・・・」

地下11階に幻影の村を作る目的は解りませんが、アランは何か物悲しい気分になりました。

そんな思いを吹っ切るようにアランは道を急ぎます。
そんなに歩く事も無く、下へ降りる階段を見つけることができました。

サリナが地下11階の地図を書いてます。

(一本道・・・村はあるが誰もいない・・・)

今度の階段は2人並んで下りる事が出来ます。天井も高いので光球をそのまま階段に移動させました。

光球が階段の中に入ると、途端に村から人の気配が消えていきます。

やはり、光りに反応して幻影魔法が発動するようです。

地下12階の踊り場に立ちました。

1本の道が天井の高い洞窟の中に続いています。

至るところで道が分岐していますが、分岐を一つ一つ確認しながら地図を作っていきます。

たまに、魔物と鉢合わせとなったりしますが、殆どが一匹での単体遭遇ですから、レベルの上ったアラン達の敵ではありません。

サリナのバックにはだいたい銀貨が貯まってきました。

途中の部屋では、幅の広い腕輪を見つけることができました。

散々と道の分岐を行ったり来たりしながら、ようやく地下へ下りる階段と、移動魔方阵を見つけることができました。

「サリナ・・・一旦戻ろう!」

サリナはコクンと頷くと移動魔方阵の上に歩いていきます。
アランも急いで魔方阵の上に乗ると、地上の広場を念じました。

魔方阵からの光りが2人を回りながら包みます。

そして、光が薄らいだと思うと・・・そこは、マウント・ワンの入口広場の魔方阵でした。

太陽は東の空です。

昼にはまだ早い時間ですが、此処で朝食兼昼食を取る事にします。
焚き火に小さなお鍋を掛けて水筒の水でお湯を沸かして、お茶を作ります。

残ったお鍋に乾燥した肉と野菜を入れて簡単に、具沢山のスープが出来上がりです。

お腹が一杯になった所で山を降りて村に帰りました。
先ずはギルドに向います。

扉を開けると何時ものお姉さんにお爺さんを呼んで貰います。

「どうした、なにか見つけたのか？」

「これなんですけど・・・」

サリナがカバンから、幅の広い腕輪を取り出してお爺さんに渡しました。

受取ったお爺さんはしげしげと眺めていましたが、幾何学模様だと思っていた模様が古代文字である事に気がつきました。

「少し、預かって調べようと思うが・・・どうじゃろうか？」

「構いません・・・どの位、かかりますか？」

「古い文字じゃからのぉ・・・2日程度は必要じゃて・・・」
「分かりました。2日後にまた来ます。」

アラン達はギルドを後にして、雑貨屋さんに行きます。

雑貨屋さんでは、携帯食料と筆記用具を購入します。

この辺で、マウント・ワンの地図を一旦清書しておこうと思ったからです。

家に着くと、お母さんにただいまをした後は、お風呂を沸かして、美味しい夕食を食べた後にお風呂に入ってお休みです。

もちろん、お風呂は別々に入ってますよ。

スライムの海

今日は、調査をお休みしてます。

サリナのマウント・ワン地図作成が意外と時間が掛かるみたいだからです。

今までの、板や布の切れ端等にした地図を綺麗な紙に書き写します。

フロア毎に書いては、注意点や主な魔物の種類、そして、階段を開くための仕掛けの操作方法等・余白がどんどん埋まっています。

でも、この地図を作るまでは、マウント・ワンにアラン達以外は入ることが出来ません。

早く作って、更なる奥に進んでみたいものです。

サリナがテーブルで地図を書いているのを横で見っていたアランでしたが、ちょっと気付いたことをサリナに聞いてみることにしました。

「・・・そういえば、前にサリナが部屋の中に何か投げて、ドカン！ってやったことがあるよね。あれって、僕でも使えるの？」

「爆光球・・・使えるわ・・・あれは私が作った。後・・・3個ある。雑貨屋でも買える。威力はそっちが上。」

どうやら、手作り品みたいですね。でも、購入品はある程度の攻撃力もあるみたいです。

雑貨屋で買えると聞いて、アランは早速買い出しに出かけます。

「ドカン！って爆発する球が欲しいんだけど・・・」

「何だ・・・アランじゃねえか・・・爆光球だな？」

「そんな名前だった・・・」

「爆光球は3種類ある。威力は無いが爆発した音で周囲が目回す、レベル1の黒球。爆発して周囲の敵を負傷させる、レベル2の赤球、噛付き蛇程度は倒せるぞ。そして、メルトより少し威力のあるレベル3の白球だ。」

「値段は、黒が銅貨10枚、赤が15で白が20だ。」

結構な値段ですが、地下10階以降の魔物を倒すと出てくるのは銀貨ですから、ここは思い切って買うことにしました。

サリナの負担を減らせる事も魅力です。

「赤と白を5個ずつ下さい!」

銀貨2枚を支払います。

「はいよ!」

おじさんは皮の袋に爆光球を入れた袋をアランに渡し、銅貨を25枚のおつりを渡します。そして黒色の爆光球を2個おまけに渡しました。

「球についてる紐を引いて投げるんだ。1、2、3、4で爆発する。いいか!4でドカンだぞ。」

おじさんに礼を言って、雑貨屋を出ます。

家に帰りかけましたが・・・ギルドにいく事にしました。

そういえば・・・鑑定を依頼してたんですね。

「こんにちは!」

ギルドの扉を開けると、カウンターの姉さんにご挨拶です。

お姉さんは、（ちょっと待っててね）ってドワーフのお爺さんを呼んできました。

「おお・・・来たか・・・例の腕輪だな・・・どうやら、【アクセル】を付加する魔道具らしい。」

「アクセルとは身体速度の上昇魔法だ。魔法のアクセルまではいかなくとも、3割程度身体速度を上げることが可能じゃ・・・しかもその状態でさらに魔法のアクセルを付加することができる。」

「ありがとうございます・・・鑑定料は・・・」

「前にも言っただはずじゃ。いらん・・・もつと珍しい物を持ってこい。それが、鑑定料だ。」

アランがギルドの扉の所でもう一度お爺さん達に頭を下げると外に出て行きました。

お爺さんとお姉さんはしばらく扉を見えています。

「今、どれ位にいるんじゃ・・・」

「地下12階だそうです。」

「・・・さっきの腕輪じゃが、王宮の近衛隊長が持っているもので2割増しじゃ・・・3割等始めて見るわい・・・それ程深くはないと思うが楽しみじゃな・・・」

「買って来た！」

家につくなり、サリナに報告です。

サリナが手書きしている地図の上に赤球と白球、それに黒球をころころと転がします。

「爆光球！・・・何故？」

「この前みたいに敵が隠れてたり、まとめて倒すのに使う。サリナの魔法の威力は凄いいけど・・・連発したら持たないよ。」

「魔力回復薬・・・持ってる！」

「それでも、不足することがあると思う。今地下12階まで行ったけど・・・結構大変だったろ。」

「解った。」

「それと、この腕輪なんだけど・・・アクセルが付加されている。僕が使ってもいいかな？」

「いい。アクセルは戦士系へ使う・・・問題ない。」

サリナは再び地図の清書を始めました。

アランはお母さんに、ベルトに付けるポーチを作ってくれるよう頼みました。

バックの中に入れておいたらイザというとき使いづらいですからね。

おかあさんは、古い皮のバックを手直しして爆光球を2個づつ入れられる仕切りのついたポーチを作ってくれました。

次の日の朝早く、アラン達はマウント・ワンに出かけます。

たっぷり休養したので体調、気力ともバッチリです。

入口前の広場にある移動魔方陣に乗り地下12階を念じます。

光りが2人を囲み・・・それが薄れるとそこは地下12階の移動魔方陣の上です。

近くに階段が下に続いています。

階段は2人並んで下りることが出来る位の横幅があります。

アランが先行し、サリナはアランの頭上に光球を1個上げて、周

囲を明るく照らします。

地下13階の踊り場にたどり着くと、早速光球を2個増やし部屋の全体を照らします。

今度のフロアは天井がアランの3倍程の高さです。

そして、広さは・・アランの家なら6軒程このフロアに建ちそうです。

でも・・床が問題です。

踊り場から、床までは、ほぼ腰の高さ・・そして、その床には・・一面のスライム・・

スライムの海みたいです。

確かにスライムは魔物中では最弱ですが・・こんなにいるとなると話は別です。

1匹ずつ倒している間に、他のスライムが攻撃してきます。

「どうしよう・・」

「試してみる・・【メルダム】」

サリナは部屋一面に群がるスライムの真中に爆炎魔法を放ちました。

ゴオウ・・って炎が広がり、部屋の中心部のスライムが消えました。

スライムの消えた床の一部になにやら他と違うものが見えました。スライムの消えた床は黒と白のタイルが市松模様に張られています。1つ、他のタイルと違って、なにやら大きなボタンのようにも見えるものがありました。

市松模様の床の見える範囲がみるみる小さくなっていきます。不審に思って周りを見ると、壁の一部に穴が開いて、そこからス

ライムがポコポコとこぼれ落ちています。

「常に一定のスライムがいるようにしてるんだ。．．でも、何処かにその仕掛けを解除するものがあるはずなんだけど．．」

「．．さっきのボタン！」

「でも、どうやって、あそこまで．．！」

「そうか、爆裂球を時間差で爆発させれば、スライムを遠ざけることが出来る！」

早速、アランは白球の紐を引いてメルダムが炸裂した場所までの中間付近に投げます。

バシュー！っと炎を周に飛ばしながら白球が炸裂しました。

近くのスライムは消滅し、その周りのスライムは目を回しています。

アランは目を回してるスライムを踏み潰しながら市松模様の床まで走ります。

アランが市松模様の床まで行った事を確認して、サリナが再度メルダムをさっきの場所に放ちます。

ゴォウ！っという炎の広がりにスライムが消えていきます。

炎が消え去り、ボタンのある床にアランは素早く移動するとボタンを踏みつけました。

ガタン．．何かが作動する音がしたかと思うと、壁の穴は消え去り、スライムの補給はなくなりました。

後は、殲滅あるのみです。

サリナはメルトを乱発し、アランは白球、赤球をスライムの群れに投げつけます。

ボワー！、バシュー！．．

ある程度数を減らしたら、後は長柄の刃で片っ端から斬りつけました。

3割の身体速度向上が上手く働いて、たちまちスライムの数が減って行きます。

しばらくすると、市松模様床には沢山の銅貨が散らばっていました。2人はバックの中から布切れを取り出してその中に銅貨を集めます。

とても全てを回収できません。2人はずしりと思い布包みをカバンに入れて、反対側の壁にあってる次のフロアへの道を進むことにしました。

スケルトンの群れ

スライムの海の反対側に開いていた黒い穴・・それは、更なる地下階への入口です。少し進むと階段がありました。

「大丈夫？・・メルダムを随分撃ったけど・・」
「まだ2発は撃てる。・・」

アランが心配そうに尋ねると、サリナは首を振ってそう答えました。

まあ・・いざとなれば回復薬もありますし・・問題はなさそうです。

2人は、地下14階へ降りて生きました。

階段を降りると早速光球を頭上に飛ばします。
明るくなったフロアには・・一面の草原・・まるでアラン達が暮す村の西に広がる草原のようです。

「あれ！」

サリナが指差す先には、上の階と同じように遙か彼方の壁に穴が開いています。

草原の草丈はアランの膝まではありません。
何処からか風が吹いているようです。さやさやと草原が揺れています。

「ゆっくり行こう・・かなり離れてるからね。」

アランの言葉にサリナは小さく頷きました。

歩き始める前に、サリナはさらに上空に光球を浮かべます。2個を上空に、そして1個を頭上少し前です。

見通しは良いんですけど・・・何か気になります。

しばらく歩いた時です。

ふと、アランは何か気になっていた原因に気がつきました。

この草原には音が無いのです・・・

アランの知ってる草原は風にそよぐ草の葉づれのサワサワという音や、虫鳴くコロコロという心地よい音に満ちています。

でも、この草原は・・・音が無いのです。

草原の草の葉は揺れていますが、音は出しません。歩くと普通なら、いろんな虫が飛び出すものですが、ここまで歩いてても虫は一匹もみかけませんでした。

「この草原・・・変だ。急ごう！」

サリナに急ぐように促します。

サリナも腑に落ちない様子でしたから、アランの言葉に足を速めます。

突然、前方の草むらが膨れ上がり、ズサーっと草原が弾けました。飛んできた砂を顔を腕で覆って防ぎます。

その腕を下ろし、前方を見ると・・・

スケルトンです。

皮鎧に身を包んだ骸骨。足にはボロボロのブーツを履き、片手には剣そしてもう片方には丸い盾を持ち、頭には金属の兜を被っています。

金属は全て赤錆に覆われていますが、カシャカシャと骨の音を響かせて近づいてくる姿は軽快なものがあります。

アランは長柄のわつかを外すと、畳んである刃を出しました。そして、サリナの前に立って長柄を構えます。

サリナも魔法の杖を構え、何時でも魔法攻撃が出来るようにしています。

更に、前方の草原が弾けました。

スケルトンがもう1体増えました。

あちこちの草原が弾けます。・次々とスケルトンが増えていきます。

・10体程度になった時、スケルトンは隊列を組みました。横一列・そして、ゆっくりとアラン達に近づいてきました。

【メルダム！】

サリナの魔法攻撃です。

スケルトン達の中央に業火が弾けます。

【メルダム！】・【メルダム！】

続けて、左右のスケルトン達に業火が弾けました。

これで、サリナの魔法力は殆ど使い切ったようです・サリナはバックから魔法回復薬を取りだすと、一息に飲み干します・これで、少し魔法力が回復します。

アランも、爆裂球を2個取り出すとスケルトン達に投げつけます。

ボワー！！と白球が弾けます。

至近距離で再度の業火に襲われたスケルトンが2体程その場に崩れ落ちました。

「ウワァー!!!」

残ったスケルトンに向ってアランは雄たけびを上げて走り出した。

駆け出して直ぐにアランは体が軽い事に気が着きました。

軽く駆けることができ、体も軽いのです・・そう言えばお爺さんが加速の効果があると言っていました。

スケルトン達はメルダムを受けて煤けています。

でやー!と長柄で袈裟懸けに斬りつけ、柄を返すと下から次のスケルトンに斬りつけます。

肉の無いスケルトンですが、頸骨や背骨を両断すると崩れ落ちました。・・どうやら、体の中心線を作る骨が急所ようです。

次のスケルトンを攻撃しようと、体を横に向けた時でした。

アランの後を取ったスケルトンが剣でアランに斬りつきました。

ガツン!と肩に衝撃を受けたアランはその場に崩れます。

止めを刺そうと剣を振り上げたスケルトンに炎弾が当たりました。

サリナが【ファイア】を放ったのです。

「ウウウウ・・ム」

アランが気がついたみたいです。

目の前に迫っていたスケルトンを長柄の石突で跳ね飛ばします。

肩はズキズキと痛みますが、幸い、骨は折れていないようです。

残ったスケルトンに近づくと長柄を一閃して上下両断します。

サリナも、離れて様子を窺うスケルトン目掛けて、【ファイア】を連発します。

そして・・・ようやく、10体のスケルトンを倒す事が出来ました。

スケルトンがスーッと消え去り、銀貨が残ります。

銀貨を拾い集め、サツサと草原を後にします。・・・また来たらイヤですからね。

やっとのおもいで壁の穴に着きました。

穴に入ると、途中に短い横穴があり、木箱が置いてあります。

アランが中を開けると・・・鎖帷子が入っていました。重いので、アランのバックに詰め込みます。

さらに奥に入ります。

ちよつとした広場があり、移動魔方阵がありました。その奥には下に降りる階段があります。

「今日は、少しヤバかった。・・・まだ肩が痛いよ。」

「・・・戻って休む。・・・明日来ればいい。」

2人は移動魔方阵に乗ると出口に向います。

光りが2人を包み、それが薄れると景色が変りました。

入口広場の魔方阵に2人は移動したのです。

そこは真つ暗でした。夜になっていたようです。

前に焚火をした場所で、また2人は夜を明かすことにしました。

焚火を焚き、バックから小さな鍋を取り出すとお湯を沸かします。

サリナは、小さなカップにお茶を入れてアランに手渡します。

そして、自分のカップにも注ぐと、残りのお湯に干し肉と乾燥野菜を入れてスープを作りました。

アランは皮鎧を脱ぐと、痛む肩をサリナに見てもらいます。

サリナはシャツを捲ってアランの肩を見て吃驚しました。だって、そこは赤黒く腫れているのです。錆びた剣で斬りつけたので皮鎧を切り裂くまでは至らなかったようですが、衝撃は肩までしっかりと届いたようです。

【ヒール！】

サリナは癒しの魔法を唱えます。

魔法の杖から柔らかな白い光がアランの肩に収束していきます。すると・・・段々と肩の腫れが引いていき、赤黒い患部も日に焼けた肌色に変っていきました。

「・・・凄い！・・・痛みがスーッと引いたよ。」

「前に、貰った魔法・・・役に立った・・・」

調子確かめるように肩を回しているアランを見て、サリナは言いました。

出来上がったスープを木のお椀に入れて飲むと、焚火の傍に横になります。

最初の火の番はアランです。

さっきのお礼に朝まで寝かせてあげようって思いながら小さくなつた焚火に薪をくべました。

迷宮外で狼退治 (1)

次の日の朝早く、2人は山を下りてギルドに向います。

ギルドの扉を（おはよう！）って声をかけながら開けると、テクテクとカウンターの姉さんのところに行きます。

「おはようございます。・・・あのう・・・お爺さんは？」

「おお・・・坊主どもか。何ぞ、面白いものでも見つけおったか？」

奥からドワーフのお爺さんが出てきました。

「これなんですけど・・・」

お爺さんに、鎖帷子を渡します。

随分と古臭いもので、全体が茶色に染まっています。

おじいさんも、胡散臭げにみていましたが、不意にあることに気が着きました。この鎖の編み方をどこかで見た様な気がしたのです。

「見たところは、古い鎖帷子だが・・・少し気になるところがある。明日、取りに來い。」

「お願いします！」

アランはお爺さんにそう言ってギルドを後にします。

「私も気になりますね。・・・お爺さんが気になるって所に・・・」
「いやな・・・この鎖の編み方なのだが・・・普通はこのようには編む事は無い。布状に作った鎖を連結用の環で閉じてお終いなんじゃ・・・ところが、これは・・・糸を編んだように作られておる。そんな

鎖帷子を昔どこかで見た記憶があるんじゃないが・・・」

「意外と伝説の鎖帷子とか？」

「いや・・・そんなものではないと思うが・・・」

そう言つと、お爺さんは事務所に帰っていきました。

一方、アラン達は村の雑貨屋さんへ向いました。

今回の迷宮探索では、爆光球が大変役立ちました。そこで、もう少し補充しようと思ったからです。

「おはようございます。！」つてお店に入ります。

「誰だ！つて、アランじゃねえか。・・・どうした？」

「また、爆光球が欲しいんですけど・・・赤、白共に5個お願いします。」

「・・・この間も買つて行つたよな？・・・強い道具はそれなりに使い場所があるんだ。あまり使つてばかりいると依存するようになる。それでは冒険者失格だぞ。」

「十分判つてるつもりです。でも、やはり使わなければ今日此処に来れませんでした。使いどころは間違つていないと思つてます。」

「それならいい。ほら、5個づつだな。毎度あり！」

雑貨屋の叔父さんの言葉は、耳痛い話です。

道具を使う・・・確かにTPOがあるはずですが・・・少し先を急ぎすぎたのかも知れません。

家に帰えると、もう直ぐお昼の時間でした。

お昼を食べながら、お母さんにマウント・ワンの迷宮の出来事と雑貨屋さんの話をして、意見を聞きます。

「そうね・・・確かに、無理しすぎてるのかも知れないわ。・・・雑貨屋さんの言う事は、お母さんは正しいと思うわよ。・・・道具に頼らない。これは、大事な事よ。・・・でも、こんな時こそ、この道具・

・という言葉もあるの。これは、貴方のお父さんがよく言っていた言葉だから覚えておいて損はないわ。」

「少し、別の仕事もしたほうがいいのか？」

「あと少しで地下20階・・・このままで行けば、3回行けば何とかなる。」

このまま進む、それとも一度他の依頼を行ってみる・・・2つの選択肢があります。

とりあえず、お風呂に入りゆつくりと眠りながら考えることにしました。

「サリナ・・・寝た？」

「・・・起きてる!」

ベッドで他なりのベッドにいるサリナに話しかけました。

「・・・考えてたんだけど・・・1日だけ、迷宮探索を休んでギルドの依頼を試みようよ。・・・冒険者になってからずっと地下迷宮探索をしていたけど・・・冒険者は迷宮探索だけの仕事じゃないはずだ。・・・迷宮探索後の仕事をする上でも、一度経験してみようと思うんだけど・・・」

「・・・いい。付いてく。」

早速次の日、冒険者の普通の仕事・・・依頼による薬草採取等を試みようとして、ギルドに出かけます。

依頼用紙が張ってある掲示板には直ぐに行かずに、まずはカウンターのお姉さんにご挨拶です。

「おはようございます・・・僕達のレベルを鑑定してください・・・」
「ちよっと待ってね・・・ヨイシヨ!」

お姉さんが取り出した水晶球を両手で持ちます・水晶の中に一瞬光りが走るとレベル鑑定終了です。アランの次にサリナが同じように水晶球を掴みます。

アランとサリナからギルドカードを受取り、カウンターにある箱の中にカードを入れます。カチ！って小さな音になるとカードの更新を含めたレベル鑑定が終了します。

「あらら・アラン君・少し急ぎすぎてるみたいね。LV18は、もう一人前と言ってもいいわ。・でもね。あまり急ぐことは無いの。マウント・ワンは貴方が地下20階を制覇して地図を作らぬ限り、誰も入れない場所なのよ。・冒険者の始まりは経験の積み重ねって言うくらいだから・いろんなことにチャレンジしても良いと思うんだけど・」

「そうですね。・実は、今日来た目的の1つに掲示板で僕達が出来るものを探す事があるんですよ。・冒険者には成ったけど・掲示板での依頼って未だやったことが無いんです。」

「そうなんだ・じゃあ、簡単に説明してあげる。掲示板は、ギルドのカウンターから右側が初心者用、左が中級者以上の依頼になっているの。」

「初心者用と言っても、5レベル毎に掲示板を区分けしてあるの。入口近くがLVが5まで、次がLV6から10・・というふうになっているわ。最後の掲示板がLV16からLV20だから、アラン君はそこか、その前あたりで探すと自分の実力に合った依頼が見つかるはずよ。」

「LVを上げるには3回ほど自分のレベル以上の依頼をしなければならぬの。アラン君がこれまでレベルを上げてこられたのは、自分のレベル以上の魔物を退治したからよ。」

「・・それと、依頼用紙に書かれた必要レベルはあくまで目安ではないわ。LV15と書かれていても、LV20相当の魔物が出

ることもあるわ。・かなわないと判断したら逃げるのよ。」

「冒険者は臆病なくらいでちょうどいいわ。勇気なんてとっとと捨てて来なさい！」

最後は少しお説教じみていましたが、近くの中年の冒険者もしきりに頷いていました。

ということは、臆病という言葉に深い意味がある・ということでしょうか。

レベルが上ったから、サリナちゃんはメルダムが8回できるね・アララン君も魔法が使えるんだから練習しないとだめよ！なんていつてましたけど・その内練習しようってスルーしてます。

壁際の掲示板に歩み寄り、依頼書を1つつ確認します。

LV16〜20の依頼書は材料の入手が殆どです。

でも、その材料が問題です。殆どが魔物がたまに落とす武器、防具や装飾品なのです。

「・・・これ！」

「・・・え？・灰色狼の討伐・LV17程度、報酬銀貨5枚。

東南の森に移動してきた群れを壊滅して欲しい。依頼達成は牙を20個以上とする・」

狼はこの間、地下迷宮で戦ったばかりです。

アラランは爆光球とメルダムで、ある程度楽に退治できると考えました。

「うん・・・これにしよう・・・狼はこの間やつけたしね。」

サリナも小さく頷きました。

掲示板から、依頼書を引き剥がすと、お姉さんの所に持っていき

ます。

「これを受けたいんですが・・・」

「・・・狼退治ね・・・アラン君がLV18なら何とかなるかも。」

お姉さんは依頼書にデン！つと対応中の印鑑を押します。

「今日から、5日間で狼の牙を20個集めるのよ。・・・頑張つて
！！！」

「はい！！」

依頼書を受取り、サリナはカバンに大事そうに詰め込みました。
一旦家に帰ると冒険の準備です。

5日間の食料等をカバンに詰め込み、毛布等は肩に斜めに背負つてます。

そして、村の南の出口に向います。そこから伸びる荷馬車が通れるほどの道は、ずっと南で街道に合流します。

これから向う南東の森は、街道の手前で東に進む道を辿ると行くことができます。

迷宮外で狼退治（2）

街道の手前にある小さな祠から森への小道が分かれています。

「どうか、無事に完了出来ますように！」って、アランはお弁当の硬く焼かれたパンを少し千切ってお供えします。サリナも途中で摘んだ野の花をお供えしました。

生死を分ける仕事ですから、頼れるものは頼ります。信仰心ってこんな事から深まっていくんですね。

小道を進むと、森に入ります。

山の森ではなく平原の森ですから、起伏はあまりありません。見通しが悪いのが困りものですけど・・・

更に進むと茂みも多くなつて、辺りも薄暗くなってきました。

アランは咄嗟に獣と出会っても対処出来るように、長柄のワッ力をずらして刃先を出しました。

長柄の真中辺りを肩の幅で握っていれば、何時何が出てもとりあえずは対処できます。

進むにつれ、周囲の立ち木も太く、高くなります・・・枝葉で空も見えなくなりました。

此れでは時間が判りません・・・お腹のスキ具合で判断する事になりそうです。

「サリナ。お昼にしない？」

少し開けた場所に出た所で、休憩をサリナに提案します。

サリナは小さく頷くと、道の脇に大きく根を張り出した大木のところまで行って、根に腰を下ろしました。

アランも並んで座ります。

お母さんが作ってくれたお弁当は固焼きパンにチーズとハムと野菜を挟んだサンドです。水筒のお水をカップに半分注いでお水を飲みながら美味しく頂きました。

狼退治の依頼ですが・・・この森のどの辺にいるのかの情報はありません。今日はこのまま森の小道を進むことにしました。

お昼を食べてだいぶ時間が過ぎました。

森の中が少しづつ暗くなり始めます。夕暮れ時のようです。

急いで野宿をする場所を探しますと、岩が重なって隙間が出来ている場所を見つけました。

小さな岩に大きな岩が斜めに重なって、3人位雨宿りが出来そうな隙間です。岩の前はちよつとした空地になっており土が露出しています。

以前誰かが野宿したようで、焚火の跡と小枝が少し隙間にありました。

早速、アランは周囲を調べながら薪を拾います。

サリナは小枝を集めて、焚火を始めました。よく燃え始めたところで、小さな鍋を火の傍においてお湯を沸かします。

「拾ってきたよ・・・此れだけあれば大丈夫だろ。」

「座つて、お茶を入れるから・・・」

アランは焚火の横に薪を積み上げました。

アランがやつと座ると、サリナはお鍋のお湯でアランにお茶を入れてあげました。

お鍋の残りのお湯に乾燥野菜と干し肉を刻んで入れると簡単なスープの出来上がりです。固焼きパンを焚火で炙ると少しだけやわらかくなります。それをスープに浸しながら食べました。

夕ご飯を食べ終わると、後は寝るだけです。

でも、まだ眠くはありませんから森の音に2人で耳を傾けます。
森の夜は賑やかです。

遠くでふくろうがホー、ホーって鳴いてますし、近くの茂みでは
虫達がコロコロ・ギーギーと鳴いています。

少し煩いぐらいですが、この音は重要な意味があります。
音が止まった時・それは、危険な獣が近づいた時です。

今は、鳴いていますから、安心して食後のお茶が楽しめます。

2人でマウント・ワン探索の反省をしたり、サリナにアランが光
球の魔法を教わったりしていると夜が更けてきます。

「サリナ、先に寝てよ。僕はまだ大丈夫だから・・・」

アランの言葉に頷いて、サリナは丸めて背負ってきた毛布を広げ、
それに身を包むと岩の窪みに横になりました。

丁度、アランの後になります。アランは腰の後に差してある片手
剣を抜いて自分の左に置きます。

咄嗟の場合は短い武器のほうを取り回しがしやすいからです。
長柄は間違って焚火で燃やす事が無いように右側に立てかけてあ
ります。

虫の音も気にならなくなりました。小さくなった焚火の火に薪を
注ぎ足します。

辺りは真っ暗闇です。

焚火の明かりが家1軒分位の空間を明るく照らしています。

焚火の火が弱まると、スーっと明るくなっていった空間が狭まりま
す。そして、また薪を追加すると明るい空間が広がります。

そんなことを繰り返していた時、突然アランは気が着きました。虫の鳴く音が聞えません・・

静かに、なるべく体を動かさずに、左手で片手剣を握みます。

同じように、右手で薪を握み焚火に追加します。・・1本・・2本・・3本・・

ガルルルル・・・

何か獣の唸るような声が周囲から聞えてきました。

どうやら、囲まれているような気がします。

勢い良く燃えだした焚火の明かりで、獣の目が光って見えます。

目の位置は低く、群れを作り、唸り声を上げる・・狼です。

アランはゆっくりと立ち上がり長柄を握みます。左手の片手剣を腰のケースに戻すと、ポーチから爆光球を2個取り出しました。

まだ、狼は唸っているだけです。少しずつ囲みを狭めているようにも感じます。

爆光球の紐を引いて、目が光っている辺りに投げつけます。更に、もう1個を投げました。

ドォーン・・ドォーンと爆光球が爆発しました。

キャン・キャン・・という叫びが聞えます。何匹かを巻き込んだようです。

グウウウ・・という低い唸り声に変ってきてます。

ガウオォン・・一匹の狼がアランに飛び掛りました。アランは長柄の石突で狼の胸を思い切り払いました。ボキッという鈍い音を立てて焚火の向こう側まで飛んでいきます。

更に一匹が襲い掛かります。長柄を腕で回しながら斬りつけようとした時、飛び掛ってきた狼の顔面に火炎弾が着弾しました。

ボォンって狼の頭がはじけたように火炎に包まれました。

「起きた・・・攻撃する！」

サリナの言葉にアランは励まされます。

アランが前面で攻撃と防御をすれば、サリナが後で確実に魔法で攻撃してくれるからです。

「メルダム！」

サリナの魔法で狼が纏めて葬られます。

近づく狼は、アランが確実に一匹づつ仕留めていきます。

「シャイン！」

アランの魔法が成功して、頭上に光球が形成されました。周囲が更に明るくなります。

狼達は空地を取り囲むようにして此方を窺っています。

まだまだ数が尽きそうもありません。

「メルダム！」・・・「メルダム！」・・・

サリナが狼達の群に魔法を立て続けに放ちます。

アランも腰のポーチから爆光球を取り出して、魔法攻撃を免れた群に投げつけます。

そんな攻撃がどの位続いたのでしょうか、

ワオオオーン・・・群の一匹が一声高く叫ぶと、群はたちまちアラン達から遠ざかりました。

呆然とアラン達は狼を見送ります。

何時しか夜が明けていたようです。森の中が遠くまで見渡す事が出来ます。

2人で倒した狼を一箇所に集めます。

数えてみると35匹もいます。依頼は20匹ですから、これだけ

倒せば十分ですね。

早速サリナが牙を集めていきます。

その間に、アランは空地の外れの方に片手剣で、大きな穴を掘りました。

いくら獣でも、そのまま死体を山積みでは気の毒です。きちんと埋める事にしました。

倒した狼を埋め終わると、どっと疲れが出てきました。

お茶を飲みたいと思いましたが、その気力ありません。残り少ない水筒の水で我慢します。

しばらく休むと疲れも取れます。

早速、森を抜け村へ帰ることにしました。

ひたすら森の小道を戻っていきます。

途中、昼食を取った大木の根っこに出会いましたが、軽く休憩を取っただけで先を急ぎます。

時間が判らないので、何時暗くなるか判りません。夜になる前に出来るだけ森から出ようと2人は考えました。

そして、2人が森を出た時には、すっかり日が暮れた後でした。

急いで小道を走り抜けます。

小さな祠の前に着くと、祠の扉を開けて中に入りました。

祠の中は立つ事は出来ませんが、屈んでいれば、3人位入ることができます。

祠の扉を閉めると、やっと一安心です。・・さっきから何か後から追いかけてくるような気がしてならなかったからです。

御神体に一夜の宿を借りることを詫びて、やっと横になることが出来ます。

お腹がすいたような気がして、今日は一日何も食べていない事に

気が着きました。

水筒に残った水を2人で分けて、干し肉を齧ります。

そして、毛布を広げ2人で仲良く眠ります。不寝番はいりません。小さいけれど頑丈な祠ですし、何といっても神様と一緒にですからね。

憑依印

「土地神よ、その2人を渡すがいい。」

「我が許に庇護を願いたる者を、何故その方に渡す必要がある。」

「我が一族を必用以上に殺戮したものを何故、その方は庇護するのじゃ。」

「誰もが忘れようとしている土地神に花を供え、自らの食するものを我に供物として分けてくれたのじゃ・・・御主なら・・・山神なら、信心の心は理解できるはず・・・」

「信心とな・・・確かに、2人の殺戮は目に余る・・・しかし、亡骸を葬ることを理解していることも確かだ。」

「ここは、わしに免じて許してやらぬか・・・」

「ここで、許せば、また殺戮を繰り返すこともありうる・・・」

「では、この2人に乗り移り、上手く御すればよいであろう・・・2人は若い・・・若い故に必要以上に殺戮を起したようにも思える。」

「恐れのみぎり・・・と。それなら少しは同情しよう。我が眷属の集まりを見て、自らを制御出来なかったと思うことにしよう・・・されば、私の意識をこの若者に憑依させ、戦いの駆け引きを学ばせる事にしよう・・・」

「流石は、山神。・・・それでこそ人に恐れられ、そして敬われる神である。」

「さすれば、土地神よ。・・・結界を一時緩めるがよい。その男に憑依する。・・・そして、私の留守の間、眷属の面倒を頼む。・・・暴

れるものを誅するのはよい。しかし、穏やかに過ごすものを殺戮するのは決して許さんでほしい。」

「承知・・・土地神同士の結束を甘くみるでない。その約束、違わずに時を過ごそう・・・結界は解いた。憑依いたせ。」

アランは夢を見ていました。

途轍もなく強い何かが、アランとサリナを森の奥から追いかけてきます。

アラン達は必死に逃げましたが追いつかれそうです。

その時、不思議な祠を見つけました。

その中に逃げ込むと同時に意識を失ってしまいました。

でも、遠いところで誰かが、誰かと議論していることが判るのです。

体がユサユサと揺らされてます。

ウン・・・って小さく唸り声を上げると、パツッと目が覚めました。

「・・・うなされてた・・・」

どうやら、何か変な夢をみていたようです。でも何の夢だったのかは覚えてません。体中に冷や汗をかいていますから、悪夢の一種だったようですが・・・

「それ・・・昨日は無かった・・・」

サリナがアランの左手を指差しました。

アランが自分の左手を見ると・・・左手の甲に赤い刺青のようなものが浮び出ています。

痛くも、痒くありません。・・・よく見ると、獣の顔のようにも見えます。

「何だろね・・僕も気が付かなかった。ぶつけた訳でもないのに、変だね。」

手を握ったり開いたりしても支障はありません。

改めて、辺りを見渡すと昨夜、何かに追いつてられるように森を抜けて辿りついた小さな祠の中でした。

今は、あの不安な心持が無くなっています。

2人は丁寧にお礼を言うと、むらへの道を急ぎました。

村に付いた時は丁度お昼時です。

ギルドに報告した後で家でお昼を食べようと考えて、ギルドに行く事にしました。

「こんにちは！」ってギルドの扉を開けました。

「あら・・もう終わったの？」

カウンターの姉さんが不審げに問いかけます。

「はい。・・これがその証です。」

アランとサリナはバックから狼の牙を取り出します。

その時、お姉さんはアランの左手の痣のようなものを目ざとく見つけました。

「ハッ！・・ちょっと待っててね。」

急いで事務所に戻ります。

何か、事務所の中で騒いでいるような声も聞えますが・・アラン達には理由が判りません。

しばらくすると、ドワーフのお爺さん、カウンターの姉さん、始めて見るエルフのお姉さんの3人がやってきました。

「坊主！・・・左手を出してみる。」

お爺さんに言われるまま、左手を出します。

3人はその痣のような、刺青のような模様をしばらくみていたが、

「これは、ただの痣ではない・・・何が起きたかを詳しく話してみろ。」

アランは今回の狼討伐の経緯を話します。

途中の祠にお参りしたこと。

狼の大群に取り囲まれたこと。

討伐の証を手に入れた後で、死体を埋葬したこと。

何かに終われるように森をあとにしたこと。

そして、祠にたどり着いた後、不思議な夢をみたこと・・・

「やはりそうなのですね・・・エルフの古い言い伝えの通りです。」

「

「わしの子供の頃にお袋に聞かされた昔話にもあったな。」

エルフとドワーフにはこの痣の秘密がわかるようです。

「あのう・・・何なんでしょうか。ひょっとして呪いとか？」

恐る恐るアランが聞いてみます。

「そんな生易しいものじゃないのよ。それは！」

「それは、呪いではなく・・・そうじゃな・・・祝福・・・に近いか。」

「祝福・・・というよりは、体現かしら？」

「あのう・・・もっと判りやすくお願いします。」

アランはきつぱりと言いました。

「神の憑依じゃよ。」

「貴方に何かを伝えるために神様が貴方に乗り移ってるのよ。」

「ええ!!」

「アランは神様なの？」

「普段は全く何も起こらぬ・しかし、神がそれをお前に教えようとする時何かが起こるはずじゃ。」

「僕に害するものではないですね。」

「逸れは無いわ。貴方に何かを教えたくて神は憑依したの。・ある意味、神は貴方を認めているの。」

「それで・祝福なのです。少し理解できました。」

「それに、その痣は、貴方が憑依した神の教えを理解したと判断すれば無くなるわ。」

「少し、安心しました。・もう取れないんじゃないかと思ってましたから。」

「それと、その印は、山神様の印・一部の獣は貴方に従うでしょう。でも全てではない。そのことに注意してね。」

「それにしても、憑依印とは・長生きはするものよ。・お、そうだった。坊主に預かった鎖帷子だが、ちょっと待っておれ。」

お爺さんは事務所の奥に行ってしまいました。

エルフのお姉さんも、いいものを見せて貰ったわ。なんて言いながら帰っていきます。

「ごめんね。ちょっと判らなかつたから、2人を呼んじやつた。・そうだ。換金がまだだよ。ちょっと待っててね。・はい。依頼完遂で銀貨5枚。それに、15匹分の牙は、全部で銀貨3枚。合

わけて銀貨8枚です。」

お姉さんは、サリナに銀貨を渡しました。

しばらくすると、奥からお爺さんがピカピカの鎖帷子を持って来ました。

「これじゃ。・よく見てみる。少し金色が混じった銀色じゃ。・ミスリルじゃよ。しかも、この編み方は魔法封じの編み方じゃ。昔一度見たことがあるから覚えちよる。・王都でも滅多に見ることは出来ぬじやろう。出来れば服の下に着ると良い。不心得者がおらぬと限らん。」

「そんなに凄いものなんですか？」

「凄いなんでもものじゃないぞ。・売れば金貨10枚は下らぬ。・いいか。絶対に上着の下に着るのじゃ。人に見せるな。・よいな。」

アランは、そんなに凄いのかな？って思いましたけど、お爺さんの真剣な顔に負けて、判りましたって頷いてます。

その後は家に戻り、昼食です。

食事を取りながらお母さんに不思議な痣の話をします。

お母さんは、最初痣を見て吃驚してましたが、アランの話を聞いて安心しました。

山神とは、狼のことだとお母さんは気がつきました。

アランに何かを教えるまではアランと共にいる。・それは狼の守護を持っていることと同じです。

少し向こう見ずなところがあるアランにとってそれは益にはなっても害にはならないはずです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9151v/>

とある王国のおとぎ話

2011年11月21日10時56分発行